

增補雅言集臨見

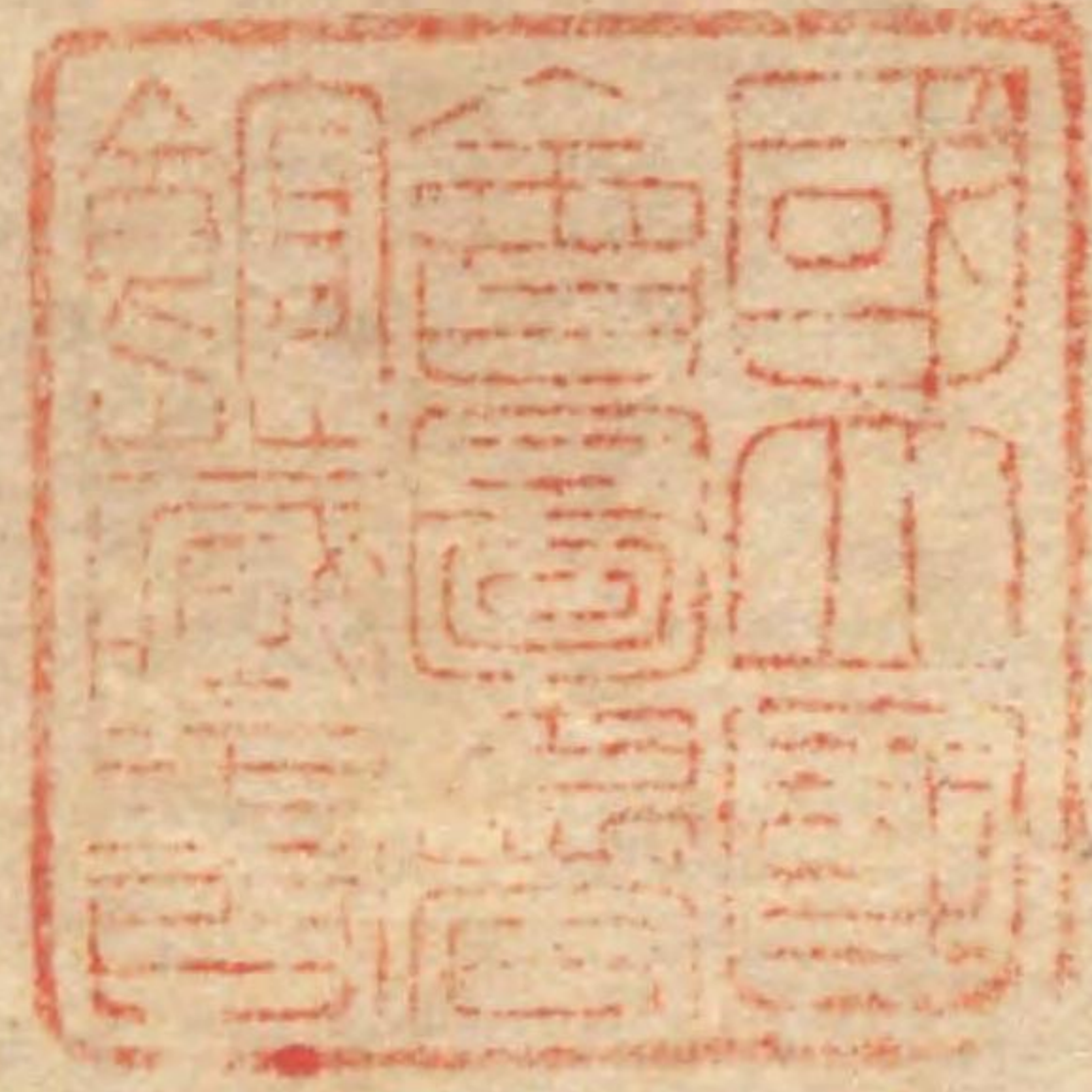
五十二

813.6

I 619g
Wm J



813.6
I 619g
NND



691368

増補雅言集覽卷之五十二

石川雅望集

中島廣足補

○之の部

〔志づ〕賤きものをいふ (源夕顔) 十 あやうきうづのをの聲々

〔志づ〕布ノ名ナリ (伊勢物) 廿二 「いよーへの志づのをたまきくりかへーむかーを今よな

そよーもがな(万) 廿九 「志づたまきかぎよもあらぬ身はあれどちとせよもがと

おもゆるりも

〔志づもた〕 (伊勢集) 卅 「みぢきかぢあらまー時^{物をイ}ハーづもたのたてぬきえたるおゆひ

せまー^{をイ}や(後) 卅六八しらす 「志づもたよへつるぞどかり白糸のたえぬる身とおもは

さらなん(夫) 卅六忠岑 長哥 わが身をことづもたよみざれてならぢありーかバ(後)

贈太政大臣 「志づもたよおもひみたれて秋のよのあくるもあらぢなけきつるりか

○(爲家抄) 二云志づもたのみたれたるやうのもの也(八雲御抄) シヅハタハひとへ

よといふ心なり

〔志づもた帯(万) 十一、廿五〕 「いよーへの志づもた帯をむせびたれたれちふ人もきみよ

まさト(同)三四一へありけん人のまづまこの帯ときかへてふせやさて(武烈紀) 二大君の御帯のーづれたむをびされ(新後) 戀六 行能 「山賤のーづれた帯のいくかへりつらさうらみよむをやゝるらん(新千) 戀二 順徳院 「いよーへのまづまたおび

のいくかへりこがたこひのまゑよむすさん
まづまた衣(夫)十四爲家 「みやまふくあき風さむとあづまやのまづまた衣いまぞうつ
ある

まづろ(盛衰)六院のやゝまをらくして御出ありけるまづろの者よの物仰ま
くければとてまをふくませおそいまを

まづま(万)十八十二 「なりえよりみをびきーつゝみふねさすーづをのとものかは
のせまうせ

まづのを(堀太)蚊遣火紀伊 「まづのをのをともまたてる蚊やり火のまたまこがれて
世をや過さん

まづり(源空蟬)四をりーく見たまふこゝちぞ猶まづりなるけをそへばやとふとみ
ゆる

まづか(源帚木)十人の家居ありさまけよと見えなつかしくやそらひたるかたな
ゆる

まづかよかきませて(抄)此所ハコ(同紅葉賀)卅いとまづかよもの遠きさま
ておむせるよ

まづがや(堀太)蚊遣火隆源 「いなーきのとこぞどのけよいひながらかやり火たてぬ
づがやぞなき

まづれ(綺語抄) 「奥山のーづりのーたの袖なれや思ひの外まぬれぬと思へ
散木) 一雪をおもみまたれるみさのえぞおればささる小笠まづれおつかり(同)

長哥くたるみおこひ白たへのゆきのーづれとあやまたれ(丹後守爲忠家百首) 仲正
「朝またまき松のうら葉の雪のみん日かけさしてまづれもぞする(同) 木よかゝれる

雪の落くるをいふ(八雲御抄) 木雪落也(同) 四條大納言哥枕木よふりたる雪のおつ
るをーづりと云也(同) 顯昭注づれ 木より落る雪也づりともいへり

まづらひ(源東や)廿一 まらうどの御出居さふらひとまづらひささけ(落窪) 三 中納
言殿よの御かさくのものそこびすされけつらふ(同) 鈴虫 四 おまをゆづり

給へる佛の御ーつらひみやり給ふも(同) 帚木 三 さとよても我らたのまづらひまを
ゆくして君の出いり給ふようちつれ聞え給ひつゝ(同) 薄雲 八 ちひさき御調度と

もうつくしけよとのへさせ給へり云々御まづらひひゝあをびのこゝちしてを

りうみゆ補(空穂 俊蔭)五十おそきなる殿云々年をろつくりみぐき云々そこよひ
りへてんとおぞしてあつらひおきて

あつらひ御座所(源あらし)十月をろの御まひよりのこよなくあきらりなつり

御あつらひかどえならせしめてすまひけるさまをさけよみやこのやんとなきと
ころどころよことからせ(榮 楚王夢)五池やり水などもきのふみかえらされて心ゆ

くさまなりよろづつらひいそがせ給ふ(源東屋)四十三條わたりよざればとる

がまざ作りさしたる所おればとるよしきあつらひもせでなんありける(榮松の

しつえ)九三月九日まるらせ給ふたゞ十日またたらぬとよと比人のおもひ

いそがんよもまさりて御あつらひまでも女房のいやうぞくよても云々(源帯木)卅

かりそめの御あつらひたり(同 蓬生)六さそがよとんでんのうちばかりあり

御つらひよかえらせ(同 玉葛)四ことあるつらひなきふねよのせてこぎいづる

そどのいとあそれよなんおぞえける(同 夕のほ)廿かりそめおれよきよけよつら

ひたり○本語あつらふ也あつらひを体語まつりふも混す補(源梅枝)二ちりき御あ

つらひ入内ノ用意のものよおぞひよきものよとねなどのとよとよ(同)三うへひん

がいのかりのそあちいでよ御あつらひことよふりうよなさせ給ふて

あづむ源初いりでのいづみ給ふらん罪をくひ奉ることをせんと(榮衣の

珠)廿御めのとの尼君あづみ入てふしぬ(源桐つは)廿御あ北のりたかぐさむり

たかくておぞいづみて(同 しの紫)六われのみりくいとづらよあづめるたよある

を(同 かのき)三なみたよいづみ給へるを(新古)雑上秋のくれよあまひよいづみて

世をのがれ侍よれる云々(源帯木)六もどのよかたりくうまれあがら身いづみ位

みトかくて(後)春上あづめるよよをかきて御らんせさせよとおぞくである

藏人よおくりて侍ける云々(源葵)八二十宮のいづみ入てそのまよおきあがり給て

ぞあやふけよみえ給ふを(安法集)「みな人のすまりの家のかえらねと身をいづめ

たる我ぞことなる(源あらし)廿まことよおぞことおきよてかくあづむならんか

ならせこのむくいありなん(万)廿「玉きぬのさるくいづみ家のいもよ物いせせ

きておもひかねつも(同)十八「いよへのおうなよいてやかくせり戀よいづま

むたをらのこと○契沖云あづみ入の泣シヅムナリ(詞花)雑上「なよと江の芦間

よあどる月みればこが身ひとつもあづまざりけり

あづむ(源夕かほ)六めあそくいづめ給ひて(同 明石)廿今更よ人よろきことをやと

おぞいあづめたり(伊勢集)廿(後)雑三「おもりけをあひみりぞよあす時のこよ

ろのみこそいづめられけれ(源わかき)下ノ思ふやうからんよの中をまち出さらば
と御方へいづめ給ひたるをのこりの命うしろめたくてうつづものゆりぐりて
忘たひ参り給ふかりたり(同 初音)八もていづめをくよりなるうをせりりうる
せかめりかといとうつくしとおぼしたり

補 忘づのいり(千載)夏 基俊 「いとゞく賤の庵のいぶせき卯の花くたさみ
たれぞふる

補 忘づのをたまき(千載)戀三 師時 「戀をのみづのをた巻くるさきのあそでいふ
る思ひかりけり(新古)秋上 式子 内親王 「それながらむりいもあらぬ秋風いとゞなが
めをいづのをたまき(同)戀五 篁 「數ならばかゝらまゝやの世中いとりあさきい
づのをた巻(同)惟成 「人からおもふ心をいひてまゝいよやさこそい忘づのをた
まき(伊勢物)五十二段 「いよへのいづのをた巻くりかへ昔を今よなまよもがか

補 忘づのかきね(後拾)春上 辨乳母 「うをりりのよひありとも梅花忘づのかきねを
おももるるりな

補 忘づのや(夫)七 法性寺 入道 關白 「忘づのやのものと蓬のかさびさあやめさかりを
ふいふりなん

忘づく(古)哀傷 篁 「水の面よりづく花の色さやうも君がみりけのおもゆるりか
○宣長云忘づくの物ノ水ノ中ニ見ユル也万葉ニ多シ其哥トモヲ考ヘテ知ルベシ
然ルナ或ハ沈浮ナリトイヒ或ハ沈ムナリトイフハ皆ヒガコトナリ万葉ニマレニ沈
トカケルハ借リテカケル字也只沈ムナリトイフハ皆ヒガコトナリ万葉ニマレニ沈
ニウツレル花ノ影ナイヘリ(万)十九廿三 「藤なみのりけある海のそきよみ志都久石
平毛玉とぞ我見る(補)催馬樂 葛城云々 えの葉るよ忘ら玉忘づくやまゝら玉忘づく
や云々 ○守部云忘づくの沈透(シツスグ)といふ言の約れるよて水中よりづめる物の水と透て
上見ゆるを云り(新千)哀傷 家隆 「花のいろもうき世よかふる墨染の袖やをきたはな
るいづくらん(万)十一十九 「あふみの海いづく白玉忘らせしてこひつるよりの今ぞま
される

忘づく 甲(源)夕霧 廿三 さればよといとわびしくてももの給そぬ御枕より忘づくぞ
おつる(後)秋下 友則 「忘づくもてよまひのおてふ花をま千代の秋よぞかけの忘けら
ん(万)十三 「我をまつと君がぬれけむ足引の山の忘づくよからまゝ物を(新)十六
(夫)十九十九 「谷かけの岩もといづくつくくと時をもとるぬるをそりか(補)万
十九 「あゝ引の山のもみちいづくあひてあらむ山路を君がこえまく(同)三十一 「あ

曾補雅言集覽 卷之五十一 四

引の山のーづくは妹まつとわれたちぬれぬ山のーづくよ

志づくら(和名)十五韃之太久良シヅクラ也(物具装束抄)切付号下鞍(万)五九さつ弓をた

まざりもちてあり駒志都久良うちおきまひのりてあそびあるき世のなりやつ
ねまありなる

志つくせ(源みのり)十御ものへけとうたがひ給ひて夜一夜さまとくの事をいつく

させ給へどひもかく(同葵)五所々の御さとき心々まいつくしたる志つらひ(同

溲標)四神のよろこび給ふべきことを志つくして(榮みはてぬ夢)十扱世よある事

のかぎりいつくさせ給ひて又かくもならせ給へれまよ御なやみもよろうから
せ給ひぬ

志づやか(源をとめ)卅八さまかたちめたくをりけよてーづやりまあまめいた

まへれバ(空穂 樓の上)廿八上今の長雨がちかり志づやりまふりてくらを日やとぎ

まかまうまなきことたり(源あかし)十かの浦ま志づやりまかくろふべきくま侍りな

んやとの給ふ(源まのな)廿五上いと心あこたまうかへらまーづやりなる所まや

がてこもるべくおせまうけゝる(同梅のえ)七心よくゝーづやりなるまほひこと
なり(同 椎か本)廿七たぐかうーづやりある御すまひをぞい

志づやのこせけ(續拾)戀二忠良「戀をのみーづやのこせけ露ふりみかりまも袖の

かこくまぞあき(神樂哥)開野志づやのこせけかまもてからバおひんや(千載)夏顯

輔「さみたれの日りせへぬればかりつみま志づやのこせけくちやーぬらん

志づまり(狭)廿四下年の布とよりもこよなくおとなび志づまり給へるけま(源 蟹)

十のどやりまおせせる人さまかれバ志づまりて聞えかー給ふ(同 帚木)卅六かりなる

やうよて大殿でもれを人々もーづまりぬ(同 胡蝶)十柏木ノさる中まもいとーづ

まりたる人なり(細)實法也(同 竹川)六志泥とーさも見えぬいといたう志づまり

たるを云々(狭)三下大將袖もえひきまかたせかき給へバ若宮あやーとおせして例

のやうまもたもふれ給をせまめたちていたうーづまり給へるを見きてゝえ出給ふ

まどけれど

志づまる(新古)三戀夏の夜女のもとまわりて侍けるま人志づまる布と夜いたくふ

けて(源 空蟬)七みなーづまれる夜は御ぞのけまひ(同)六志づまりぬかり入てさら

バたせられとの給ふ(玉葉)戀二為相女「まどろまん心もかくて待宵まやまくーづまる

人さへぞうき
○志づまれる(源 空蟬)六わらまかれま物れ心をへ人のけしきみつべく志づまれる

をとおぼすなりけり(同)十空蟬心さこそおぼむれどあさむらよあらぬ御けしきを(同)をとめ八さるゝものこらひかどままとくすぐつゝおぼまれるかぎりをとえり出して

おぼまる 衰タル源野分七そこら所せかり御いきりひのおぼまりて此君をたのもし人よおぼしたる

おぼけい (万)三ノあへてこぎてんよともおぼけい

おぼころ (拾)雜春「春のをしとぎすそたきりまよおぼひこづらふいづこゝろりか

おぼころか (玉葉)春下兼輔「櫻花よふを見つゝ歸るよいづ心かきものよぞありける(詞花)春贈左大臣母「故郷の花のよふひやまさるらんいづ心かくかへるり

がね(古)春下友則「久うたの光れどけれ春日よいづ心あく花のちるらん(敦忠集)「い

つどかくいづころなきとが戀れさみたれよもみたれをめけん〇おつ心下心ナルヘシ廣足云抄注イカ、

おつさく (大鏡)なすけたいの失錯シツサクありける(著聞)權大納言行成卿その失錯を扇よおるして(飭抄)失錯(續後紀)承和十年十二月ノ條有失錯之罪

おづめ (源)帝木八十四人とくおづめて御せうそこあれと(同)榊三世れまつりごとを

いづめさせ給へること(補)新後戀二小侍從「浪さうれゆらの湊をこぐ舟のいづめもあへぬこが心りか

おづみ木 (拾員)上「かみた川春れ月かみたつごと身のいづみ木れ下よくちつゝ

おづく (源)寄生二四十つといひもうとめ又なぐさめもかたくよおづくと聞え給ひつゝおそす(同)帝木卅ささぐよ口とくなど侍きとおづくと申せば(蜻蛉日記)中前なる谷より雲おづくとおぼるまいと物りなうて哥云々夫卅六信實

「數からぬ身の山りけのおづくと物あそれよなるをまひりな

おつ (盛衰)卅四法住寺殿のさしも執しおぼしめし造り琢られたりけれども一時がよとよ焼亡びぬ

おづもる 鎮座

おね 稻フナ

おねい (字鏡)續殘纏織餘也志彌糸〇今の俗よいふもさトね也

おねん (源)帝木五人よもてかづりれてかくるゝ事もおろくおねんよそのけさひ

こよなりるべし(うつろ 國讓)上ノさるのむりより心ざし侍れどおねんよおこた
 る(同 初秋)上ノ深きさいのそれよむりひて手をふれしむればおねんよおもひ出ら
 る、物なり(うつろ 國讓)中、四只今此世の右大將親子の御代よかりなんとすめり云
 それのかの君のおしちあしきよもあらせおねんよむづりしきよよりて人のこ、
 ろをつりへばなびくやうあるなり(源 帶木)七、おねんよ心をさめらる、やうよかん
 侍りし(同 蜻蛉)七、おねんよ事どものけしきもこそみゆれとおもへば(文選)何晏景
 福殿賦、襲陰陽之自然○郭璞江賦、自然往復○禰衡鸚鵡賦、挺自然之奇姿(源 帶木)
 卅、おねんよおほかるべし(無量壽經)下、不知修善惡逆無道後受殃罰自然趣向
 品(源 末摘)廿、けしきよおもよらぬこさかりけり(同 東屋)八、品あてよえんなら
 ん女を願む、やまをくえつべし(神樂)弓古本、弓といへまお、きものを梓弓まゆみ
 槻弓おおも、とめせ(源 帶木)六、中の品よかん人のこ、ろくおのがお、のさてた
 るおもむきもみえて云々その品々やいりよいつれを二つの品よおきてりこくべき
 おか不き(落窪)三、さうしき所まん所をさためて所々などおか不きさせ侍る
 おなへ(夫)一、若菜 俊頼「もりみ川うさえよゆるるくのうれをつましなへてもその
 みゆめり(源 明石)四十「わたつみよおかへうらぶれひるの子は足た、ざりし年の

へよけり○契沖云(万)十、五於君戀之奈要浦觸吾居者秋風吹而月斜焉(同)第二八九
 夏艸思萎而トイヘルおなえなり云、いへたる字よてなゆるかりしなへと書り
 なたぐへり(補)万代(戀)二、小大進「かさねてしよこれ衣手なれぬれさしなへうらぶれ人
 を待る、(同)雜四、知家「草枕月かたふきぬこよひもやいなへうらぶれ獨ありさん(万)
 三、「眞木葉乃之奈布勢能山之奴波受而こがくえゆけり木葉しりけむ(同)十五
 廿二、「いさゝめよ今も見てし秋さぎのおなひてあらむ妹がすがたを
 おなどの風 科戸の。風ノ(延喜式)廿。六月科戸乃風乃天八重雲吹故事乃如久(源
 朝顔)六、あか心うそのみ此罪のミなをとの風はたぐへてきとのたまふ○風の名
 なり
 おなたりく(源 玉葛)七、此君ねびと、のひ給ふまよ母君よりもまさりてきよらよ
 父おと、の筋さへくも、れをよ品たりくうつくしけなり(同 幻)十、たいのまへは
 山吹こそ猶世よ見えぬ花のさまなれふさのおりきさかよ品たりうなどのおきて
 さりける花よあらんをなやりよぎせしき方いと面白き物よかんありなる
 (同 帶木)五、人の品高く生れぬれば人よもてかしづりれて
 おならひ(源 浮舟)三、よろづ右近ぞをらこしならひける

志なん 指南(文選)一 東京賦幸見指南於吾子

志かののち 信濃梨子(空穂藏聞)中ノ 志ろりねむすびふくろよ志かのな一りあつめあんど入て

志かくたる(つれく) 一段 志なくたり顔よくさけなる人よも立まどりて(孝徳紀)九 大夫以上各有差降

志なやり(源夢浮橋) 十いときよけよ志なやりなるわらひのえから走さうぞきたるぞあゆみ來たる○契冲云長袖颯纒ト文選ニミエタリ

志をでゝろ 品心(源若菜) 上七さふらふ中よ品をでゝろすぐれたるかぎりをえりてつかうまつらせ給ふ

志あてる(源さわらひ) 七「志なてるやよ布のみづうみこ舟のま布ならねどもあひみーものを(補)古事記傳(卅三) 一ほとりの近江の海よ云々とあるを心得誤りて近

江海の枕詞よまほてると云ことのあると志あてる云々と云ことゝを一ツは混らかし誤りてよめるなればもとよりとかく論ふよ足らぬことなるをや

志あさたまる 縁づきた(源帯木) 九いとりく品さたまりぬる身のおやえならで(補)志あめく(枕) 十二 ことさしあめきをといへばいえる人もさく人もわらふ

志なとく(源紅葉賀) 十いつりひかどもおしをえて云々三尺のみづーひとよろひよ志あとくつらひすゑて(補)源柏木 十女房の中よも志あとくし思ひあてたる

きはとく 志なとく(宇治拾) 十凡けたりく品とくしをりしけなる事田舎人の子といふべからせ

志なとく(源浮舟) 廿馬なる人々の例のあらりある七八人をのこともお

やくしなとく(源) からぬけそひさえづりつゝ入きされバ(狭) 一ノ上車さしよせたる

よ五十さりりなるおとゞの品々しからぬさましたる(同) 卅一 下道成今いふりひな

けれバ云いと品々しからぬやうよても御心よありぬ事かくやをらりよて過させ給

へ(源東屋) 六十 田舎びたるされ心もてつけて品とくしをらせをやりならまーり

バしもかた志ろふようからましとおもひなを給ふ(同) 四十九 みづからさりりいた

たひたふるよ品々しからせ人けかうさる方よそひこもりて○品たりきの品をり品

品しからぬハ上品からぬといふ詞なり

志かひ 藤花其(枕) 三 木の花ハの條、藤の花しをひ長くいろよく咲たるいとめでた

し(伊勢物) 段 一 その花れ中よあやしき藤の花ありけり花のしをひ三尺六寸をりり

なんありける(催馬樂)大路 青柳が志をかひをみれば今さりりかりや今さりりなりや
(新古)兼賀 「神代よりけふのためとややつりそよすがたれいねのしなひをめけん
補(万)十三、春山之四名比盛(狭)一、上御まみつらつきかどのうつくしき花のよそひ
藤のしをかひよもこよなくまさりて

志あす(源紅葉賀)廿七此君をいりよいかし聞えぬるよりと(同 桐つは)卅池のこゝろ

ひろくしあしてめでたくつくりのしる(同 松風)十水のながれもをりう志あす

たり(狭)二、上。大將弁ヲタノ。弁詞 けさの物のいりまゝ給へる補(源 権う本)

三所よつけさる御志つらひかどをりうしなして(同)四十おびさうなげよいかし

てぎ、引隠してよまへり(同 須磨)五十とりつりひ給へるてうどもかりそめよ

かしておまし所もあらはよみいれらる

補(志ら)いひか(千載)秋下 前大僧正行慶 「雪ならまがたよのみいつもらトとおもひ

とくよぞし菊の花の白被知兼、濱臣云大りたの白よ不知といひかくるを此哥の

被知といひりけたり(新古)雜上 「なれくして見しなぞりれ春ぞともなご志ら川

の花れしたりけ 補(志らいと) (風雅)雜下 白絲を人の心よたとへたる事をよめる高辨上人 「むりしたれ人

の心をしら糸れをむればをまるいろよあきけん

志らよきて(神代紀)上下枝懸青和幣アチコゼツ和幣此云シラコギナ白和幣シラコギナ

しらべ(六帖)四貫之 「ときとある松れ志らべよひく琴のをこよ君の千とせとぞな

る(六帖)下(新古)「琴れねよひゞさかよへる松風ししらべてもなく蟬のこゑりあ

(源明石)四 「あふまでのかたみよちぎる中のをれ志らべのことよかたらざりけり

(同)卅九ことある志らべをすのりよかきからし給へり(枕)二、我もとより志た

る事のやうよこと人よもりたり志らべいふもいとよくしコレハイヒシロヒなどのしらへる

志らぬどころ(源手習)六志らぬ所よするおきて

補(志らぬりそ) (万代)戀四、西宮 「ひささちよたのめば人のつらくとも志らぬがそ

よてあらんとぞおもふ

志らぬよ(源朝かほ)三 おおえぬ罪よあたり侍りて志らぬ世よまどひ侍りしを

補(志らぬ翁) (万代)雜六 清輔 「わりざりりやよいづりよへゆきよけん志らぬ翁よ身を

バゆづりて(同)(風雅)雜下 資隆 「朝よとよあそれをいとよます鏡しらぬ翁をいつまで

りみん 志らぬ國(源手習)五志らぬ國よきよけるこゝちして(千載)旅こゝろの外なること

ありて忘れぬ國に侍りける時康頼

忘らぐ(万)四ノ卅六「我たもとまりんとおもそんまをらをの涙よ忘づみ忘らぐおひよ

たり(後)冬兼輔「とてととと忘らぐ此かををますりみみるよぞゆきの友は忘れぬ

る(新古)雜上堀川左大臣「おいよける忘らぐ花もゝろともよけふれみゆきよゆきと見

えけり

忘らぐふ(源)總角四十ことさらよ見え忘らぐふ人もあり(枕)四ノ廿二のちよはからひ

たるよやつねよ見え忘らぐひてありく(源竹川)六ころき男のこゝろづりひせぬな

う見え忘らぐひさまよふ中よ

忘らぐさね(枕)二をさまとさき物、八月此よりがさね(頼政集)上ノ十二「けふやさの卯

花色の忘らぐさね春のつゝとよ引りへつらん(堀太)更衣俊頼「夏ごろもたちきるけふ

の忘らぐさね忘らとどな人よりらもあしとい(夫)七定家「ほどもかくこぞ此月けけめ

ぐりあひてまたよちきたる忘らぐさねかな(新千)夏六條内大臣「立かふるかどり此

さぬの忘らぐさねかさねてもあやうそき袖かき(賢治百首)俊成「なつくれば衣が

へして山賤のうつぎが死ねも忘らぐさねせり

補忘らりゆ(仲文集)雪ふりさるつとめて院の御りゆのおろよたませせて歌よめ

とおせられしうば「忘ら雪れふれるあした此忘らかゆいといよくよたる物よぞ

ありける

補忘らりい(万)十、五、九「あし引れ山路もいらを忘らかしの枝もとをよ雪れふれ

れバ(朝忠集)「忘らかしの雪もさえよあしびきの山路をたれりふみまよふべき

忘らりす(十訓)三人を忘らりし其座をさまをなり

補忘らとづ(兼輔集)「忘らたづれあま此原よりとびつるいと忘れこゝろをいそ

るなるべし(万代)雜三、二品親王覺性「からさきよ舟やよそらん忘らたづのむれて忘りつ

浦づたひさる

補忘らたまづさ(貫之集)文かよそす女のいりありけんあまたよび返事もせざ

りけれバやりつる文をたよかへせといひやりたればふみや死たりけるそひをつゝ

ておこせたりけれバよみてやれる「君がさめこれこそむひよなりそめてめ忘らこ

まづさややけてりひか

補忘らつる(重之集)「松がえよすみて年ふる忘らつる此こひよきもの雲るを

りけり(壬二)上「霜がれのあしまたたてる忘ら鶴のしらぎいくよの年へぬらん

忘らね(六帖)六芦作「人忘れ物思ふとき難波あるあし忘らねのしられや

そる○此哥貫之集五あーの忘らねもせられやのする新千載あーの忘らねぞ忘
たよなぐるゝとあり

忘らかこ(散木)「まをらをの鵜川の瀬々鮎とるとひく白繩のたえせもあるりか
○顯昭注云忘らなはどの以繩魚あるところを引まさせ魚のなりへちらでとらる
る也それをバ白繩といふ也これの鵜川からでもそる事あり

忘らかく(貫之集)「あけだくる山路のひともし忘らかく我心のみつねよゆくらん
補(後)戀五よみ人しらす一「きみぐあたりくもるよ見つゝ宮路山打こえゆらんみちもいらな
くよ

忘らなみ(古)雜上みよ八らす一(六帖)雜風下一「風ふけバ沖つ忘らなみさつた山夜もよ君が
ひとり行らん○顯注おきつゝ波とぬを人を忘ら波といへを白波のたつといひ
つゞいて盗人のさつおそろしき山を君がゆく心也又云今案盗人を白波といふこ
どの侍れと必しもぬを人とおもてせよもやよみ侍けん浪のたつものかれバおだ
つ白波さつた山とよみ侍ぬべ一万葉集一「さたつみのおきつ白波たつた山いつ
あこえあんいもがあたり見ん(著聞)二くしけをぬままれい兒のよめる歌「白波の
たちくるまよ玉くしけ二見の浦のみえせなり一伊勢物語」風ふけバ云々

夜もよやきみぐひとりこゆらん○此歌古今集よての初二の立田山の序よいへる詞
かれと物語よて白波の盗の事よとりなしてかけるなりと古意論あり後世れ一説
も盗の事よしてとけり(拾)雜下旅人のぬす人にあひたるかたけける所藤原為頼「忘らなみのたつたの山入
まれりおあトかざりの名よやけがれん(新勅)釋教法眼宗圓偷盜戒「こえトたゞおあト
かざりの名もつら立田の山れよその忘らなみ(後漢書)靈帝中平元年張角反皇甫
崇討之角餘賊在西河白波谷爲盜俗号白波賊云々

忘らむ(山家)上一月出る軒よもあらぬ山れその忘らむも忘らトよそのしら雪
忘らむ白虫(續古事談)四ふところより白虫をとり出してかうらんのひらけたよ
あてゝ大ゆびよて殺しけり

忘らうり(小大君集)ちひされ瓜のきかるを云々「ありどころこまりよいづら
しらうりれつらをたづねてこれからさかん

忘らうめ(歌仙落書)風躰面白きさま軒近き白梅の盛なるとやいふべからん廣
按コハハクハイと字音よかけるなるべし

忘らくる(忠見集)春「年とよまつらん數のさねぞみんいたゞく髪の忘らくるま
でよ(白文)十頭白不出門

補 忘れまき(山家)下「山里の心れゆめまどひをれば吹いらまきかせのおど
りか

忘れまき(空穂 俊蔭)上 此琴どもをばいりて作しぞ手ふれで久しかりまけるま聲
も忘れまき七ながら同ト聲まのいりてど、のひたるぞと、ひ給ふときま(長門平
家) 四 これを忘れまきとと平家の方より云々 五百騎の勢まておめいてかゝる

忘れけ(沙石)忘れけてみゆる狐りか(土佐日記)海のまたおそろしければかいらも
みないられぬ**補**(万)九ノ黒りり**髪毛白斑奴**

忘れけ(うつろ 吹上)下ノよねいらけたり(金葉)泉上和 あやしの賤女がよねいらけ
侍るありと申けるを聞て「さぎのゐる松原いりまさくらん忘れけのうたて里ど
よみけり(拾)夏恒 「神まつる卯月まさける卯花の白くもきねがいらけたるりか

忘れお(源 花の宴)十とりト、まもの、ねども忘れべあせせてあそび給ふ(同 紅
葉賀) 十さうのことの云々 平調まおしくたして忘れべ給ふ

忘れふ(住吉物語)そちいらひたるをぐたいとめやまくいとすきさまをり
(今昔)ひきいらふ云々 いひいらふま云々 引いらひたるま云々

補 忘れあこ(續後拾)雜上 順徳院 「みよこれ、瀧の白あこおちさざりふけども風の聲

もきこえき(後)編旅 素性 「秋やまよまどふ心をみや瀧のたきのいらあこまけちやせて
てん(新葉)春下 成直 「山ざくら咲ま後のみよの、たきのいらあこも花りどぞみる

補 忘れざりき(續古)離別 元輔 「忘れざりけ田子けうらなみ袖ひぢて老のわりれまか
りるものとの(同)戀五、入道前 「忘れざりきちざりし中の跡さえて夕ぐれをかり身
まとまれとの

忘れさうぞく(榮 初花)卅 六をくりけ忘れさうぞくどものさまと、をるの

忘れぎ 新羅(堀次)紅梅 仲實 「紅ま咲かさねたる梅の花新羅りやりて何まあらへん(八
雲) 新羅、仲哀紀まみの崇神紀ま雞林ともあり(万代)雜四 國基 「ふかでせしそりま

いづらつしまよの忘れぬ忘れさきの山ぞみえける(古事記)下ノ新良國主(源 晴輪)卅
家のうちまかたものいそくなくもろこし忘れさきのりざりまゆいつべきま云々

忘れきり(源 行幸)廿 紫の忘れりみゆるあられぢの御小うちぎとよき衣をこま
れて(細)シラミクロミタルナリ(河)紫ノシラミキバミタル色カうますらみと書タ
ル本モアリ

忘れゆふ(霜 雪波)夫)十三 盛方 「すみよこれ松のこきゑをまいたせばこよひぞかくる月
の忘れゆふ(詞花)冬、關白 太 新院位まおそま、時 云々 「くれかるまみえしとせ

るも雪ふれば忘れゆふかくる神あひの森(千載)神祇通經「そみよしの瀆松がえは風ふ
れば波の忘れゆふかけぬまぞを(堀百)神樂「夜をさむみとる榊葉はおくもを
忘れゆふ花と人やみるらん

忘れゆふ花と人やみるらん
忘れゆふ花と人やみるらん

忘れゆふ花と人やみるらん
忘れゆふ花と人やみるらん

忘れゆふ花と人やみるらん
忘れゆふ花と人やみるらん

忘れゆふ花と人やみるらん
忘れゆふ花と人やみるらん

忘れゆふ花と人やみるらん
忘れゆふ花と人やみるらん

忘れゆふ花と人やみるらん
忘れゆふ花と人やみるらん

忘れゆふ花と人やみるらん
忘れゆふ花と人やみるらん

忘れゆふ花と人やみるらん
忘れゆふ花と人やみるらん

忘れゆふ花と人やみるらん
忘れゆふ花と人やみるらん

忘れゆふ花と人やみるらん
忘れゆふ花と人やみるらん

忘れゆふ花と人やみるらん
忘れゆふ花と人やみるらん

忘れゆふ花と人やみるらん
忘れゆふ花と人やみるらん

忘れゆふ花と人やみるらん
忘れゆふ花と人やみるらん

忘れゆふ花と人やみるらん
忘れゆふ花と人やみるらん

〔浦となくわたる千鳥もこゑさむい霜の忘らその有明の空

〔忘らせり不(信明集)卅一露のおけどわりをる宿の萩り枝のかくこそ秋を忘らせ顔

なれ(源みをつくし)卅七かの御遺言をかこちて忘らせ顔は参らせ奉り給へり(後)

戀六よみ「うらむれどこふれど君がよと、もよ忘らせが不よてつれあるらん

人しらす

〔忘らせながら(玉葉)旅小弁「そい柱それとさりりもみるべきよ忘らせながらも

をぎよけるりか

〔忘む(み)染(古)夏遍昭「そちすそのよでりよいまぬ心もてなまりの露を玉とあざむ

く(同)戀恒三「さ、れそよおく初霜のよをさむみまみのつくともいろよ出めや此ま

水ノ類(榮月の宴)三御さえも限りかゝわりのりたよもいみどういませ給へり(源

若菜)下ノかやうよあさけびたるかせいよまぬよやあらん(袋草子)三ノ二右衛門尉孝善

「鶯は初音や何のいろからんさけば身よいむ春の曙(源帯木)十よでりよいめる不

さよりも(同)夕顔七我心ががらいとく人よ忘むこといなきを(同)六もてあら

つるうつりがいと忘みふりうまつりうて(同)あかし廿あさりらせ忘めたる紫の

紙よ(同)初音八忘ぶうを侍従ハくゆらりて物でとよいめたるよ(同)末摘卅さも

や忘みつりんとあやうく思ひ給へり(万)卅一酒壺よなりよてりりも酒よいみかん

○補 忘むる (金葉)春俊頼「春雨のふりいむれども鶯の聲いをれぬ物よぞありけ

る(風雅)夏爲兼「夏澄きみどりの木立庭とはみ雨ふりいむる日ぐらこれやぞ(源わ

かな)下八朝夕をいみもあきころなれと身よいむること、ちいていそんりたなくお

すゆ

補 忘ん 眞(大鏡)樂府をうるそいくいんよりきうらよの御筆をとぐめてさうよ

補 忘んとい 神拜(更科日記)あづまより人きたり忘んといといふとさいて國のう

ちありきいよ水をりいくながれたる野のさるよとあるよ

忘んがち(方便品)八新發意菩薩供養無數佛

忘んり 臣下(空穂 嵯峨院)三忘んりといふ物の君の若くおむいませ御心のおろりよ

おそいませ時こそ侍れかく明王のことおそいませ世よ何ごとをりの定め申さん

忘んりう 深更(盛衰)卅九夜の深更よなりぬ人のかりをいづめさりければ

忘んたい 進退(源 檳柱)卅三

せせばともかくももとより忘たいからぬ人の御事なればとぞきこえ給ひける(枕)

六ノ小法師をらのもたるべうもあらぬ屏風かどのたりきいとよく忘んたい(今

十五)と一此の妹などのやうよをさらりよむりへたり頭これをきて何さまよもこれ

昔

の我進退よか、らんぎるものなめり(盛衰)六十四平家のみあろびぬ天下の君の御
あんなたいなるべし

あんなたがめ秦太瓶 (四)下法然坊申されけるの此などの談議の所詮のいり

が御心得候と俊乗坊申されければ秦太瓶一かりとも執心とならんものすつべし
どこそ心得候へとりたる

あんどく親族 (枕)十二家ひろくきよけよてあんどくのさらなりさび打かたらひな
どせる人の(同)八ノ宮のそどりのまつりおもてぬをらからあんどくの中

あんならう(空穂 嵯峨院)九十さいつ頃そとくしきびやうきをなんもて侍りてか
こくあんならう侍るなん

あんでん寢殿 (源紅梅)三七間のあんでんひろく大ききつくりて南おもてよ大納言
殿のおそい君西よ中の君東よ宮の御方とすませ奉り給へり(同末つむ)五あんでん

よ参りさればまさかうしよさか梅のりをうしきを見出して物給ふ(和名)十
寢殿四聲云寢七稔反和名 (源蓬生)六さそがよあんでんのうちさうりあり御志

つらひかそらせ
あんでん真言 (源薄雲)廿僧都詞あんでんのふりき道をたよかくしとむることな

くひろめつうらまつり侍り
あんなみやう(無名抄)上さるそどかるあまの身命の衣ぬをみて小袖よしてささるや

うよあんなおやゆるとぞ人申侍り
あんな新司 (後)一忠房朝臣つの守よて新司をるりたりまうは屏風てうして○受

領の四年其國を治めてかそるよ其代りよ來る國司を新司といふ
あんな進士 (枕)一それの于定國が事よこを侍るかれ古き進士なごよ侍らむらうけ

給のりよるべくも侍らざりけり(源をどめ)十五その日れふみうつくしうつくり給ひ
て進士よなり給ひぬ

あんどち(空穂 俊蔭)二七あめの下の人のきえたえてまどふ君をあんどちよあら
ねどうれしくこそあれ(伊勢物)四十哥云々とよてたえいりよけり云々いとかく

しよあらととおもふよあんどちよたえいりよければまどひて願たてけり(うつろ
藏開) 下十三此侍るもののかの君ならぬ人よ只今のまたいとをさなく侍れば奉らん

とも思ふ給へぬ物をあんどちよあるやうよもの給ひけるうなあやしき事申とてこ
らひ給ふ(大和物)六いとあやしき事たしよとひ奉りてことなんの給ひつるとい

へはあんどつよのあもつうたよりなりとつから聞えんとを聞え給へといひければ

(寶塔品)七十 釋迦牟尼世尊如所說者皆是眞實(源 東や)十一いさけなく年たらぬと
よおそはともおんトちの親此やんてとかくおもひおきて給へらんをこそ不いかお
ふよいせめ(うつ布 國讓)五十 お布やけの御いそぎのあんとつよ月やさたまりて侍
らん(伊勢物)まめよおんトちよ

給せん我かんえおんせまトきとの給へ(同 帚木)十、中將 いみトくおんトてつら杖
をつきてむりひる給ふ(同 あら)九いぬるついたちの日は夢よさまことあるもの

の告しらす事侍りしうバ信トグたき事とおもひ給へしと十三日はあらたなる
しるしみせん云々とかさねてしめし事の侍りしうバ云々

あふ(執)方丈記)身は官録あらせ何よつけても執をとらん
あうと(空穂 國讓)上、一そのりみむこもあうとも心をひとつよて

あうとめ(枕)四、一あうとめよほめらるゝむこまたあうとめよおもてるゝよめの君
(土佐日記)あうとめやくふらん(榮 淺みとり)一十あうとめの北の方とたてまつり

よ出たまひて
あうとく(宿徳(源 橋姫)十、あうとくの僧都僧正のきまの世よいとまなくきまよくよて

(同 手習)九十 それのりたちもいとうるさうきよらよあうとくよてきまことある
さまぞし給へる(注)徳を植たる人也(續紀)卅五、施高叡法師封三十戸優宿徳也(源

行幸)十、さけたちをむろよものし給ふよふとさもあひていとあうとくよおもゝちあ
ゆまひかど大臣といえんよたらひ給へり(空穂 樓の上)下、六戸口よ朽をのそをこれ

几帳のぬひ物したるたてゝいとおとなうあうとくよある聲よて詞云々(同 國讓)上、
十袖君まさこきみの御めのおとあひよたれどかたちしうとくよてありわらひあ

りし人ぞおとなよなりてわらうとよてある(同)上、五北方姫君をこの見給ひてり
の山ざとよものし給ふ人よこそいあめれみしよりもいとしうとくよ死よけよもか

りよたるりなたれからんと見給ふ(同 さの院)七十かくて御むりへよおとまきみ
たち出給ふ左衛門のかむのきま何りまゐり給ひせとも忠澄のまゐりてまゐりてさせ

奉りてんおとまゝりれど一所をたよこれらりしづき奉るべしいとんや七所のうま
これ宮たちむりへ奉りたらんよ何の事とらあらんあうとくよつくらんまよ事ひきい

でゝいえグひもあらト我ぬしたちの心もしらす若き男女おやをらりらとこし給
ふやまよくおもふべきよもあらざりけりとの給へ(三代實錄)廿五、延諸宗宿徳僧百

人以備威儀(漢書)武帝記、武帝因集置諫議大夫皆名儒宿徳爲之

あうる 得(源わのな)下卅此ことをまねびとらんとまごひてたよあうるのかたくなありけるを

あうねき (源空蟬)九かくあうねき人のありがたき物をとおをよ(同葵)十五

あうねき みどりきけんざよもあたがむあうねきはしきおぞろけのものはあらせとみえたり(同)十例のあうねき御もの、けひとつさらうでかせ(落くる)二あうねがりてき

あうねき うぬま(枕)十二いとあうねき御もの、けし侍めるを(宇治拾)十五あうねくも

あうねき りかゝりてきければ(源檣柱)八あやうあうねき御もの、けしづらひ給ひて

あうねき あうく 秀句(つれく)八十御坊をば寺法師とこそ申つれど寺のなければ今よりの

あうねき あうく せうくどこを申さめといそれけりいみどりき秀句かりけり

あうねき あうき 周忌(新古)哀傷 覺快法親王かくれ侍て周忌のまては墓所ままりりてよみ侍ける

あうねき あうん 四韻(源をとめ)十むらせの人々のあうんたゞの人のおとゞをむとめ奉りて

あうねき あうん せくつくり給ふ

あうねき あうん 可考(拾玉)四「それもいさつめは藍あむことのもあうんとりおくれたを

あうねき あうん 可考(拾玉)四「それもいさつめは藍あむことのもあうんとりおくれたを

あうねき あうん 可考(拾玉)四「それもいさつめは藍あむことのもあうんとりおくれたを

あうねき あうん 可考(拾玉)四「それもいさつめは藍あむことのもあうんとりおくれたを

あうねき あうん 可考(拾玉)四「それもいさつめは藍あむことのもあうんとりおくれたを

あうねき あうん 可考(拾玉)四「それもいさつめは藍あむことのもあうんとりおくれたを

あうねき あうん 可考(拾玉)四「それもいさつめは藍あむことのもあうんとりおくれたを

あうねき あうん 可考(拾玉)四「それもいさつめは藍あむことのもあうんとりおくれたを

あうねき あうん 可考(拾玉)四「それもいさつめは藍あむことのもあうんとりおくれたを

あうねき あうん 可考(拾玉)四「それもいさつめは藍あむことのもあうんとりおくれたを

あうねき あうん 可考(拾玉)四「それもいさつめは藍あむことのもあうんとりおくれたを

あうねき あうん 可考(拾玉)四「それもいさつめは藍あむことのもあうんとりおくれたを

あうねき あうん 可考(拾玉)四「それもいさつめは藍あむことのもあうんとりおくれたを

あうねき あうん 可考(拾玉)四「それもいさつめは藍あむことのもあうんとりおくれたを

あうねき あうん 可考(拾玉)四「それもいさつめは藍あむことのもあうんとりおくれたを

あうねき あうん 可考(拾玉)四「それもいさつめは藍あむことのもあうんとりおくれたを

あうねき あうん 可考(拾玉)四「それもいさつめは藍あむことのもあうんとりおくれたを

あうねき あうん 可考(拾玉)四「それもいさつめは藍あむことのもあうんとりおくれたを

たるハ草見といふべし志のをつくといふこと無下ハ近き詞かり是もまた偽書の一證也古くハ志のよふるといへり上梅園日記の説

志のよ(和名)十四清器師乃波古信友云俗ニ小兒ノ小便ヲ上方ニテハシト云ヒ東國ニテハシイト云フモコノシ也

補 志のよをりてへ(拾愚)上「夏衣たつとがをきてみれば志のよをりてへ浪

ぞたちける(新後)騷旅順徳院「ぞとくる志のよをりてへ旅衣を以日も志らぎ山の志

さつゆ〇河社ニ云貫之家集第四云天慶三年うちのおせせことよて夏さらへを「川

社志のよをりてへ衣いりよせせなりなぬかひざらん又云同四年三月うちの御

屏風のれうのうた夏神樂「行水のうへよいせへる河社か波たうくあそふある哉

初の歌新古今集神祇部よ延喜御時屏風よ夏神樂の心をよみ侍るとていれり云々

志のよをりてへ衣と積よあが物とて衣など出れを小竹よをりうけてそれよ

麻の葉をもて水をよぎて死よむるを繪かればいつもさてあるよよいりよせせ

りあぬりひざらんとはよめるよや

補 志のたけ(万代)戀四元良親王「志のたけけふいのあまたよみゆれどもよようとくもかりまさるりか

志のよ(窪のすさみ)十九今案よ志のよ草志のよ志けき也万葉集第八夏

山之木末乃繁爾ヤノコと書り袖中抄よあきの布を志のよおしなみといへる哥の注よ顯昭

云志のよおしかみとい志けくおしかびかきなりとあるよも志るべよ和名鈔云々但し此志のよ草をよめるハ

俊成卿の歌始り出所志りも彼卿其物を志らざるよなりされハ契冲師も俊成卿ハ

此志のよ可考志りも彼卿其物を志らざるよなりされハ契冲師も俊成卿ハ

のちの歌よハ小竹と心えてよまれたりとい見ゆるもあり新勅撰前關白おさまよふ志

のよ信實垣ねかる志のよ

草の冬枯よ志もおく風のこと志志記るかり辨内侍日記くるハ夜の志のよ信實垣ねかる志のよ

ぞよまてくたくる露ももる志ぐれりな新千載後西園寺入道袖ぬらす志のよ小竹

のかりいは露の宿とふ秋のよの月されハ八雲御抄よ志のよ小竹草を皆志のよといふ

ものところえてよめりといのたまひかり補新古戀二「ちらはなよ志のよ葉

草のかりよても露りるべき袖のうへりハ

補 志のよ(散木)雨中郭公「たれさうんこせのさ山の杉れうれよ雨もよのよみく死

志のゝをふゞき(夫)^{十二後}「むさゝのゝ志のゝをふゞきさむれよりつまもこもら

ぬ男鹿かくかり(催馬樂)逢路 あふみぢの志のゝをふゞき(同)や○眞淵云篠吹風ノハ

ゲシキ也ユキマゼニフクナイヘリ(夫)^{十九喜多院入}「こひこびぬつれなき人よ

あふみぢの志るべよりよへへのゝをふゞき(同)^{十九後久我}「日かせさへへのゝを

ふゞき立かさねあふみちとちき行末れそら

補 志のゝをさゝ(万代)^{夏宇治入道前}「ゆふされば志のゝをさゝをふく風のまた

元は秋のけしきあるり(同)^{夏行}「夏のよへのゝをさゝれふちりみそゝや

さなくあくるかりけり

補 志のゝをすゝき(新干)^{春上}「冬がれのゝのゝをすゝき打なびき若かつむ野よ

春風ぞふく

志のゝめ(古)^{戀三}「志のゝめれ別をゝみこれぞまづ鳥よりさきま啼もつめつる

(同)^{夏貫之}「夏のよのふれりとをれば郭公かく一こそよあくる志れゝめ(源 帯木四

三「つれなれをうらみもそてぬ志のゝめよどりあへぬまでおそろりはらん(新古)

秋上貫之「山がつかれれよさける朝がねの志のゝめからであふよもな(源 橋姫五

五卅ありゝ志のゝめ思ひ出られて(白文)^八凌晨親政事六

志のぐ(續古)序 此べの草を志のぎて手向をむむびつゝ(字鏡)傲、傲、不敬也、佞也、慢

陵也、蔑也阿奈止留又志乃 (夫)^{十二}「をみなへし秋そぎのぎさをゝかの露こけな

りんたりまの野を(古)^{戀一}よみ「おく山の志がれねのぎふる雪れけぬどりい

さん戀のゝけき(万)^八五「たう山のすがれそいぬれふる雪のけぬどりいども戀

れゝけゝく(古今)の志のねのねの誤りなるべ(万)^十九「君よこひうらぶれを

れば志のぬれ秋そぎぬぎさをゝなくも(千載)序 出雲やくもれあとをゝのぎ

志きゝまやまとの境入り(万)^三三「おく山の志がれ葉ゝぬぎふるゆきれけあ

ばをゝけん雨をふりそね(新勅)^冬基俊「おくやまのまつのをゝれぎふる雪の人の尋

めなる花よどありける(万代)^冬家經「山里れ檜の葉のぎふる雪よいでり人の尋

ねきつらん(同)^{兼氏}「今のまたおのが時とや高圓のあきそぎのぎ鹿のなくらん

(万)^{十九}七「いとせ野は秋そぎぬぎ馬なべてそつとがりたよせせやこられん(同)

六「おく山れ眞木の葉ゝぬぎふる雪のふりのまよとも土よおちめやも(同)^八四

「うたの野れ秋そぎぬぎなく鹿もつまよこふらくこれよまさらト(神代紀)陵物

之意(守部)云陵の凌と同一萬葉云々あよみて塞る物を押分押伏ても漏入分通る

やうの意よ云り云々今の俗よ寒暑を凌くと云も其中の一つあり

志のや(堀次)元日顯仲「旅人のかりれ一のや二年くれてけふ二とせよなりよけるりか

能因(續千)羈旅爲氏「夢をたよまつといいと難波ある芦れ一のやれよその秋風(新千)

「五月雨の日をふるまよひまぞなれあ一のれやの軒の玉水(夏)資盛

志のお(源寄生)九九十十の中びたる人とも忍びやつれたるありきもみえトとてくち

りためつれといりゝあらん(重之集)二「春の雨は忍ぶる事ぞまさりける山のみと

りも色よ出よけり(躬恒集)六「かけてのみまつゝぞ忍ぶ紫よいくゝをそめ藤の

花をも(古)維下「わきられん時一のべとぞそまちどりゆくへもいらぬあとをどむ

る(元輔集)九「万代の秋や一のさんたをかきたる扇の風のおそり久しく(貫之集)一

「行てみぬ人も一のべと春は野よつたみよつめるころなゝりけり(六帖)二(伊勢

物)十五一のぶやま志此びてかよふみちもがな人の心此おくも見るべく(重之集)

八「うれことも春一のびてありぬべ一花のちりかん後れりか(万)三二「ま

れのそれ志のおせのやまぬをきて我こえゆけばこのそりけん(同)三五「世間

の常かくのみとかつれといたれこゝろの志ぬびかねつも(古)戀一人不知「おもふ

よ忍ぶることぞまけよけるいろよはいせトとおもひ一物を(源)蜻蛉卅六かく物忍

したるさまも○シノブトいふ訓の文字多一友を一のぶなごの偲字也故郷を志のび

昔を一のぶの憶の字なりかくれ一のぶの隠の字なり又一人不見とも書り心よ堪へ

一のぶの忍の字あるべ一老談一言記(古事記)十四志奴夫といふ言よ戀一のぶと堪

一のぶと隠志のおと三の意あり万葉までの哥をよの戀一のぶぞいとおそくあり

て余の二つのまれなり古今集よりこたの哥又文よの堪志のおも隠一のぶも多り

りさて戀一のぶと余の二つとい意いと遠くして相とたらせ本より別言あるべ一堪

一のぶと隠一のぶとい近くして相通ひて聞ゆること多一(新拾)戀一花園院「いとせ

めて志のおる中此玉章のおもふ限をかれもつくさ(同)輔親「おもひつゝこゝら

れといを一のぶくさ志のおる布とよつみてけるりな(千載)戀三よみ「なみたをも

志のおるころのこが袖よあやあく月のやとりぬるりか(頼政集)改名「あふみてふ

名をきたがへて一のぶれば我をあきとや今のたづねん(万代)朝忠「いつとなくぬ

る、袂のいよ一へを志のおる露と成ぬべきりか(紫式部集)「なれ人を志のおるこ

ともいつまでぞけふれあそれのあはの我身を(著聞)五ノ「いよ一へを一のぶる雨

とたれりみん花よむり一の友よなけれ(新古)秋上「あそれまたいりよ一のさん

袖のつゆ野原れりせよ秋の來よけり(拾)神樂哥「めづらさきふの春日のやをど

めを神もうれしと志のささらめや(好忠集)「長月此萩のかれそよおくつゆの花を
一のぶる鹿比涙り(万)六ノ「お不からばかゝくせむをかこみとふりたれ袖を
志ぬびたるりもノ意ナリ

志のお草(古)戀五 登朝臣 「獨のみながめふるや此つまなれば人を忍ぶの草をおひける
(和名)ノ部 垣衣一名鳥菲 和名之乃 布久佐

志のおせり(伊勢物)初このをどこ志のおせりのかりきぬをあんたたりける(古)戀四
「みちのくれ忍ぶもぢせり誰ゆゑよみされそめよ我ならなくよ(新千載)離朱雀

院の御時藤原親盛がから物の御使まよりりけるよこがねの火うちよ沈のなくそを
志のおせり此袋よいれてつらもそとよみ侍ける(權中納言敦忠)「うちつけよおもひやい
づと故郷のこれお草してせれるなりけり○ミチノクニシノブ郡ニスリ出セルナ
打ナガヘテミダレガハシクスレリ

(袖中抄)童蒙抄ニ云陸奥國ある信夫郡よりもぢせりとてみたれせりけるを出せき
ぬの名也(堀川艶書合)「みちのくれ志のおもぢせりいろ見えぬこゝろ此おくをい
りべたのまん(千載)夏 匡房 「ともしるるみや城がむらの下露よのおもぢせりか
こくよぞなき

志の手(うつろ)國讓 中ノ二きさみたる志きよかきて山吹よつけたるの手の手春
四十七

の詩青きしれしよりきて松よつけたるのさうまで夏の詩赤れしきしよりたてうれ
花よつけたるのなをトめよ 云々

志のび(万)十二もみつをばとりてぞ志のお(同)廿六「大伴比高師の瀨の松がねを
まきてぬるよの家し志ぬさゆ(源夕顔)卅こゝよくへきよし志のびていへ(同)末摘

十男のいとつれせぬ御さまを打忍びようい給へる御れとひ 云々(同)桐つは 十志
のびての参り給はんや(枕)廿三 忍びて給せたりつるといひてこゝまでさへひき
しのおもあまりなり(古事記)下ノくよをも斯怒婆米(枕)六ノ二月卅日三月朔日比

花ざりりよこもりたるもをりきよけなるをのこどもの忍ぶとみゆる二三人櫻青
柳かどをりうてくゝりあけたるさ貫のそもあてやうよみささる 云々(源
桐つは)九ひとがらのあそれ情あり御心を上の女房なごもこひのびあへり

彌(万)十九「よくたちてかくかちどりうべこそ昔の人もしぬびさよけれ(同)
十六「うつせみのよいつねなしと志るものを秋風さむみ思努妣つるりも○(新古)

雑下入道前關 「むりよりむなれがたれはうれ世りかかたみよのおなりならね
白太政大臣

とも(美濃家苞)かたみよのびてむつまき男女の中こそなれがたれものなれ
それよあらねどもむりよりいとひ離れがさき浮世ぞとかり(尾張家裏)此義な

りよく解えられたり(美)下句我どう死世との間をいへるやうにも聞ゆれども(尾) 誰も此義は心付事也(美)さての中といふこといふべからうへは一首此趣をうきふしもか(尾)かよりくは初の義あり(尾) **志のび** コラヘシ (源 桐壺) 十もの思給へたらぬこゝちよもけよこそいふと志のびがさう侍けれとて(同) 六さらよえ志のびあへさせ給をせ(同) 須磨 四 あそれと志のびをさかりかきつくし給へるの見どころもありぬべりりかど **補** (新拾) 釋教 寂蓮 「谷の水みねのあらしを志のびきてのりの薪あふぞうれしき」○鈴屋翁云三の句堪忍び來て也

志のび ○又女のもとへあよみなどをも志(源 松風) 五 惟光の朝臣例の志のぶる道のいつとなくいろひつうまつる人かれ(伊勢物) 五十 あたくらべかたみよける男女ののびありきけることなるべし(詞花) 維 志のびたる男なりけるきぬをかしあましとておのければ(枕) 三 しのびたる所よての夏こそをりけれ(同) 九 十ものへたてよきくは人の志のぶるが夜中などうちおどろきていふこといふことえ **志** 男もしのびやりようちをらひたるこそな事ならんとをりけれ(山家) 上 「さぐくれよちりとよまれる花のみぞ志のびし人よあふこゝちする(頼政集) 「かをり

くる花橘の道をあけてしのぶねどこを人よしれぬる(同) 「月さよみしのぶる道ぞしのぶれぬ夜よかくれてど何おもひけん(長秋詠藻) 中 頼輔朝臣の歌合よよみておくりし五首中忍戀 「いりよしてあるべかくともさづねみんしのぶの山のおくのかよひぢ(神武紀)(安康紀)(雄略紀)(繼躰紀) なぞ密の字を訓せたり

○志のさん 契沖云コハミルく愛スル心也(古) 秋下よみ 人しらす 「戀しく見てもしのさんみちさを吹なちらしを山おろしの風

志のび いる カクス (源わかあ) 上 五 いみたく忍びいり給へる御ねくされのさまを待うけて

志のび (新勅) 戀一よみ 人しらす 「難波女のことやよ夜ふけてあまれさくしのびよたよあふよしも哉(六帖) 上 六 「いりさまよおふる物ぞと玉かづらいで忍びよねもみていかな(重之集) 五 (新後拾) 上 春 「ふる雪れ下よよへる梅の花しのびよ春のいろぞみえぬる(中務集) 八 (夫) 五 中務 「人めのみもる山よかくよぶことり志のびよたれをなまく音かるらん(六帖) 上 五 「あいのやれこやのしのやれしのびよいなくまろひひとのつまなり(同) 下 同 「いつそりれなみたかりせばから衣志のびよ袖の志をさらま(源さのさ) 五十 志のびよ御ふみかよそかどして(後) 夏よみ人 人しらす 「そとよぎせ

こゑまつるといふからでしのびよかくを泥りぬなるらん(古)^三戀やよひのついた
ちよりのびよ人のものをいひて云々(同)同たちをのきよきが志のびよあひ
れりける女のもとよりおこせたりける

志のびどころ(源 楨柱)廿こゝら年へまへる御をみかれいりてり忍びどころなく
はあらん

志のびりへ(源 寄生)十何かはりひかた物からかゝるけいきをも見え奉らんと志
のびかへつゝきもいれぬさまよて過し給ふ

志のびかね(古)^{戀三}友則「わがこひをしのびかねていあゝびきの山さちをのいろよ
出ぬべし

志のびかく(源 柳)卅をりもあされまあがちよしのびり泥給へらん御心をへもよ
くからねん

志のびづま(長秋詠藻)中(續詞花)藤原顯「志れびづまお泥ゆくそらま郭公をこり
おろくもな泥わたるりな(和泉式部物)」こととりや今のころさトこのしらね志の
びれつまのいふことよより(補)玉葉(雜一)兼宗「志のびづま歸るをこりれうつりがを袖
まあらそふまどのうめがえ(小侍從集)」志のびづまあくればかへるをりまれ涙

もよすうぐひをれ聲(月詣)戀下隆季「忍びづまさまぬものをうぐひすのひとくひ
とくとなまゝかゝらふ(同)戀中兼覺「志のびづまお泥つる後いさゝぬ戸をたゝくま
りぬ水雞かりけり
志のびね(源 晴蛉)九「志のびねや君もかくらんかひもあき志でれたをさよこゝろ
かよそゞ
志のびのこ(源 薄雲)廿そこよひりくしのびのこされたる事ありけるをかん思ひ
ぬるとの給えられ
志のびや(源 桐つは)十五志のびやうま心よく泥りぎりの女房四五人さふらせ給
て御ものがたりせさせ給ふなりけり
志のびこと(狭)卅四下ありつるしのびことゞもいみゝとゞまることやまとりさりつ
らん(源 總角)六十かゝる御しのびことよよりやまざとの御ありきもゆくりりよお
せしたつなりけりるゝしおんありさまと世のひとも志たよそりまうを
りど

志のびこと(詔詞解)廿一書紀敏達卷より末の卷々ま誄をシノビゴトタテマツ
ルと訓る是也此字累舉其平生實行爲誄定其謚以稱之也また哀死而述其行之辞也な

と注したる皇國の志のび詞も其意也

志のびこめ(源 行幸)五いま、でりくしのびこめさせ給ひけるうらみもいりゞそへ侍らざらんと聞え給ふ(同)廿きこえんよもいまくしき有さまをいふのびこめ侍れど(同)廿一こと打出きこゆるついでなくしのびこめたりければ(同)廿今まで志のびこめられたりけるをかんりへりてうしろめた心なりとおもひぬる

志のびありき(源 夕顔)初六條とたりの御志のびありけの比(同 蓬生)十例のこれ光
いかゝる御志のびありきおくれねばさふらひけり(同 花の宴)六さもたゆまぬ御
しのびありきなりなとつきとろひつゝ

志のびく(古事記)上誰來我國而忍々如此物言(源 帚木)廿志のびくの御りたゝ
がへどころいあまたありぬべけれど(同 すま)四十志のびく御門の御めをさへあ
やまち給ひて

志のびく(古)大所陸奥のあどちれまゆみわがひりを末さへよりこ志のび
のびよ(源 楨柱)廿御文のびくあり

志のびくと(空穂 國讓)中かう志のび人まうはたまふめる人をも二つかくおせ

さこくとの給を

志のびせ(源 帚木)廿たづねまどもさんともりくれ志のびせ

志のびせ(實國集)一五月雨のびの此をがさふどころまで水
い來よけり

志のびせ(宇治拾)五侍おせつとおもひてぬふりたるを云々此侍
おせせてゐたり

志のびく(源 夕かほ)十いせこのりづらきれりみこそさりう志おきたれとむつりり
て(同 日の紫)五さいいへどくまのつかさよて志おさけることなれば(同 蓬生)五み
よとおもひ給ひてこそおせ給ひけめあどてかりろくしき人の家れりざりと
いなさん(同 幻)廿みづからおき給ひけることなれど

志のびせ(源 わかあ)下五せうをこおせせたり

志のび(式子内親王集)一かみな月あらの軒をそらひつゝねやまでくこの志お
りけり(源 若紫)十いろくまちりまどりしきをけりと見ゆる(後 秋中)「秋
の野よおくしら露をけさみま玉やけるとおどろれつ(同 夕きり)六十 おま
しひとつ志りせ給ひて

忘く(金葉) 雜上、皇后宮大貳 「石たゝみありけるものをきみよまたしくものかゝとおもひけるりな(仲文集) 卅 詞云まことゝてむしろのかたまりあるありてありつ死よかへりきたるよ板のうへよさへをりおられてひえよけりとうらみければ「こととりや忘さのさこそひえつらめきみよくべきおもひかければ

○忘りト(續千) 戀四、道綱母 「打もらふちりのみつもるさむしろもかけくかきよいりトとぞおもふ

忘く(古) 雜下、今道 「忘りよけんきゝてもいとへよれ中のかさこのさびぎし風ぞくくめる(日本紀) 重浪 ナシキ (菅万) 頻浪 上 (後) 秋中、朝康 「忘ら露し風のふ死しく秋のゝつらぬ

さとめぬ玉ぞちりたる ○契沖云かさかりしきるなり 補(万) 十九、十八 うらがなし春れをぐればとゝぎすいやし死なさぬ(同) 九、十六 「ありと死の夢よみえつゝ梶島のいそ

こす浪のいきてゝおもほゆ(續拾) 冬、頼氏 「まゝをりる道やたえかん山がつのいやゝ死ふれるよとれゝら雪

忘く(霞) ニ(千載) 春上、攝政前右大臣 「かきみしく春れし不ちを見とたせばみどりをはくる沖つゝら浪(和泉式部集) 下 「るりの池と人もとつべし我床のなみたれ玉とゝきよ忘

ければ

忘くをへて(源玉葛) 八 おほみありの事をどこゝまでいくとへかとする不どよ日くれぬ(同) 東や、八 づし二くいなごあやしきまぞ忘くへて心をやりていそけ

忘くのかゝ(枕) 三、四 五月よ忘くのかゝさうおよもぎあごのかをりあひさるもいみ

トウをりゝ

忘ぐる(源) わあき、上、七 まとのあたりうちぐれてひをみるたり(同) 寄生、四 空のけしき哀ようちゝぐるゝよも

忘ぐれのあめ(万) 十、四、十五 「忘ぐれの雨まなくいふればま死れどもあらそひかねてい

ろづきよけり

忘くれをち(貫之集) 三、下(六帖) (拾) 戀 「おろ空のくもらざりけり神無月忘ぐれで

こちのこれのみぞする(風雅) 雜上、和泉式部 「けふのなすひまこそなけれり死くもるゝぐれをちのいつもせゝくど(和泉式部集) 下忘ぐれいさうふる日とやうみゝひとよ

「ひまもかく忘ぐれをちのふりがたくおせゆるものひむかゝりけり
忘く(新六) 春雨、爲家 「さすひめれさつやかきみの薄衣忘くゝぬらするさめぞ
ふる(万) 廿、五、十四 「おく山のい死み々もあれなのことや忘くゝ君よこひとたりかん
(右京大夫集) 四、六十 九へがたくろをしくて忘くゝとかくより外のことぞお死(夫)

河邊東人 「もろさめのくくくふるよたりまどの山のさくらわいかゞあるらん〇

シクくくく重々也補(万)十七 「やまぶきのひまゝさねぬうるまゝとあがもふ君

ひくくくおもすゆ(同)同卅四 「あぶたよのさねのありそよよる浪いやくくく

まいまゝへおもすゆ(同)同卅五 「なこのうみのおねつあら浪志くくくまおもすえん

おもたちよかれあバ(同)同卅七 「さぶあみのあがさゞれなみ志くくくまどこよとね

みがおもすせりける(同)八五 「真木のうへまふりおける雪の志くくくもおもすゆ

るりもさよとへとがせ(同)十二四 「けひの浦まよするあらなみ志くくくま妹がすが

たはおもすゆるりも(同)十四四 「春日野まあさるる雲れ志くくくまこれのこひまは

月ま日まけま(拾愚)上 「春雨のくくくふれバいなむろ庭まみたる、青柳のい

と(風雅)春中爲基 「あさみどり柳のいと此打まへてはふもくきくく春雨ぞふる

志くものあ(源)薄雲卅二 もろこまゝの志くものまゝまゝまゝくものあといひ

まへめり

志や(古事記)中阿々志夜胡志夜此者嘲咲者也(今昔物)九二 やつらの猿まゝて心

ひささめまおとれり又一や足うち折てんものをとのゝる(万)九二 己が父ま似て

のかりせ一やが母まゝてのかりせ〇俊頼朝臣の抄物まみえさり(宇治拾)十一一 敵ま

て仕りたりけるなめりとおもひ給れば一や頭ともをまつてかくさふらふ也(同)二

甘隣あるめらんのくやまりめてるを一やか一らを取て打ふせてきぬをまぎ侍

りつれば(同)九十六 一やか一ら打とらんと一つるものを(同)十三九 一か一ま志や首切

て犬よりひてんといへバ(宇治拾)十五二 虫の一や尻一火のつれて(竹取)下さり髪を

とりてかなぐりおとさんさ尻をり死いでこらのおをやけひとまみせて 云々

(盛衰) 五むねんの一たいくまくまづねて一や口さいていまめよ(平家物)十一

志やつとらへ引よせよ 云々一やつらをむせくどぞふまれける備(平治)十三一や

首切てきてんことたゞ今まこをあめれ

志やり 舍利(名義集)五十三

志やりぶつ 釋迦佛(狹)三卅五 大將ノ さのまおや一とりてけるをいりでり御ころ

またがふ事ハ侍らんさるべくこそ釋迦をとれも三づをも出給ひまけれさねの世れ

ちぎりおとしまはらん 云々(玉葉)神祇春 「これゆるんゆきてまもらん般若たい釋

迦のみれりのあらんかぎりハ

志やりむ一佛弟子(源)すま卅一 四卅一 やりむ一佛弟子とかのりてゆるらりまよみ給へる

(河)釋迦牟尼佛弟子某歸命頂禮白佛言 云々本朝文粹願文

おやたう 邪道(宇治拾)十四ノ今ノ邪道は落なんぢるうじ事なりといふ

おやう 莊(源すま)十御おやうみまじ

おやう 錠(源あさかは)二十ころく〜とひきてトやうのいたくさびまければありきと
うれふるを補(宇治拾)廿一ノ門のもどまよりよりておやうをねぢて引ぬきて

おやうまち 正日(源幻)廿御正日よのかみもの人々をかいもるして(細)惣シテハ

四十九日ナイヘリコ、ニハ周忌ナイヘリ○眞淵云落クボ物語ニ落窪ノ君父ノ喪ノ

時後ノ忌三十日ニ歸リ玉ハント夫君ノ方ヨリ聞エ玉ヘド四十九日迄オハセシト見

ユレバ法事ハ三十日ニ終リテ四十九日ヲ正日トイヘルニヤ又君ハ十月廿日アマリ

其日マデトイフニヤ(源葵)卅御法事かど過ぬれと正日までの猶こもりおそま(榮

あさみとり) 十九日ハ御正日よて

おやうまち 上日(平家物)六、いまた夜ふり〜又さるめまもぞあふとて上日の者をあ

また付て主の女房の局までおくらせま〜ける

おやうまん(千載)哀服まこべりける時ある上人の死たりける日云々(釋氏要覽)十

摩訶般若經曰何名上人佛云若菩薩一心行阿耨菩提心不散乱是名上人云々

おやうと 淨土(落窪)四よろづの事淨土のこゝちをるこがとのを打てて、まららん

こそものくるを〜けれ(拾)雜賀よみひ「こひするまどけよあるといまませバこ

れぞ淨土のあるトあらま〜

おやうどのおく(とりかへちや)卅三ぢでくのそこおやうどのおくまでくもりなき

こゝちをるよ

おやうとう(枕)六、初瀬常燈よのあらで内よ又人の奉りたるおそろ〜きまでもえ

たるよ

おやうり 唱哥(狹)三、上ふたりへりをりひき給ふよいとこりかき聲をおと〜あけ

おやうりするよ

おやうたいない 無正体(沙石)上器量の仁をえらびて持齋〜律學せ〜むといへさも

時至らざりけるよやみを正体かき事よてありけれども堂主の中よ器量の仁を以て

常喜院といふ所よて夏中のおひた律學〜侍り

おやう僧(狹)三ノ講師ハ山のさまをかりけりおやう僧ハ六十人七僧などもあべてな

らぬをぞせさせ給ひける

おやうらう 上臈(空穂 樓の上)五十 大殿のいりめ〜う上らう〜う作りさる事こそあ

れみどころえりうのあべきならせ(源 帚木)卅これハ上臈の中よもおろりる事ぞり

一(宇治拾)廿五 かしこよの上らうのこよひさりりとてりらせ給ひつればかゝ奉りてわれはこゝまこそふしたれ(禁秘抄)廿二 中藤ノ内侍來小上藤候障子外取傳(源あふひ) 三 四十二條るんよの云々 上藤どもとまかうのやりて(禁秘抄)三 不謂是非二三位典侍号上藤着赤青色候御陪膳也不補此等職聽色大臣女或大臣孫也孫猶或不聽或聽之(同)四 不謂善惡公卿女号小上藤着織物并表着也

おやうらくごん 上官(枕)八ノ女房どものやり上官かどのある障子を皆うちとやりそこなひさりかど云々

おやうぐごん 政官(源淨舟)五十りの内記のいやうぐごんかれはおくれてどまるれる(注)太政官ノ被官ナル故ニ隙入テ遲參スルニヤ

おやうけ(公事根源)正月一日 供御藥〇これの元三の儀也云々 主上晝御座より出御かりて生氣の色の御衣をよのつねの御なりのうへまかさねめさる陪膳の典侍典藥頭も生氣のいろを着す(拾芥抄)下末四 生氣 一切療治 正子、二丑、三寅、四卯、五辰、六巳、七午、八未、九申、十酉、十一戌、十二亥、

おやうふさやう 常不輕 (定頼集)七月十五夜山のさまのここのみりとよ常不輕つきまけるを(源總角)八さてはおもひ給へえたること侍て常不輕をかんつりせ侍るかど申をよ云々この常不輕をわたりりる里々京までありまけるを云々(同)八一 不輕の聲のいりり聞せ給ひつらん云々〇廣足云此卷よて

おやうこ 上戸(古事談)一於鳥羽院御前有酒宴之日宰相中將信道爲上戸而一兩度ノ後固辞ス

おやうごん (榮玉のかさり)十堂のいやうごんれいのいとめでた

おやうえ 淨衣(更科日記)四十 供の人々淨衣すがたなるを(盛衰)廿一 白き淨衣より立烏帽子きて(和事始) 昔本朝士庶人ノ官ナキモノ、禮服ハ立烏帽子淨衣ヲ用

ノ白張ナリ淨衣ノ下(源夕霧)三 僧のふせおやうえなどやうのこまりあるものをさへ奉り給ふ(榮玉の臺)八 伴僧十一人をりりしておろきとやうえを祀ておこなふ(平家物)五ノあたらしきえぞ淨衣を祀

おやうぎ 將基 (園大曆)大炊御門大納言入道同入來有將基興(明月記)建仁四年十二月十日宇治御幸の記其傍置圍碁雙六將基等盤(台記)康治元年九月十二日參院於御前與師仲朝臣指大將基余負

曾補惟言集覽 卷之五十一 二十八

大將基

大將基

大將基

おやうきやう 上卿 (千載) 上 雑 右大將兼長春日の祭の上卿よ立侍けるよ 云々 (玉葉) 神祇
四月八日松尾祭使よたちて侍りけるよ内侍の誰ぞと上卿のたづね侍りけるよ 云々
後深草院
少將内侍

おやうめ 上馬 (源をどめ) 五十 むかひよみまやして世よあき上めどもをとゝのへさせ給へり (空穂 藏開) 上 五十 二あるトのおとゞいみト名高き上め二つ鷹二つ大將殿よ奉れ給ふ

おやうト 障子 (古事談) 六 隔明障子謁之 (落くや) 一 へたてのおやうトをあけていづれば

おやうト 精進 (枕) 二 ひとひさりれおやうトんのけたいとやいふべくらん (空穂 國讓) 上 一 黒き御たいひとよろひおやうトのものいときよらよてもの参る (大經) 上 十三 本 光明悉照編此諸國如是精進威神難量注此二句神道莊嚴諸佛各於其上勲作化事故云精進

おやうくわい 尙齒會 (百鍊抄) 四 安和二年三月十三日大納言在衡卿於粟田山莊設尙齒會希代勝事也 (續世繼) 六 才學よして尙齒會とて年老たるとき詩つくりなたりあつまりてふみつくることおこなひ給ひき (瀆臣云高倉帝御時承安二年二月

十九日於白河寶莊嚴院行之詳清輔朝臣尙齒會記 廣足云尙齒會記ハ (月詣) 上 清輔朝臣の尙齒會をおこなひ侍りける七隻よてよめる 宮内卿 「いとひこいおいこそとふ

はうれしけれいつりかゝる春よあふべき (同) 同 養和二年三月よ賀茂重保尙齒會おこなひとべりける七隻よてよめる 祝部 「むりよもかそらぬものを花の色ハ老のすがたのかゝらまゝ (同) 同 垣下よてよ 「おめの内れためよひらんおいら

くの花ちりかゝるまとるありきと
おやうおゆん 上旬 (古事記) 中 五十 當四月之上旬 レラウツキンカミントナカニ

おやうせ 上手 (源行幸) 廿 この御手よむりよ御上手よもの給ひけるを (同) 帯木
五十猶まことの物の上手いさまことよ見えたりれ侍 (同) 竹川 卅 いと物の上手なる女

さへおろくあつまりて (狭) 四 上 ひとゆきよひさわたされたる筆のあがれもトやうなご是を上手といふべきぞりよとみえていとめでた (源末つむ) 廿 いと上手よ

おそそれいとおもいろうふき給ふ (後漢書) 二 上手工巧 (大和物) 四 かへいの上
手かれバよりりけめとえきりねバかゝせ
上衆めき (空穂 國讓) 中 七 實忠也 中納言物もの給を涙をのみ流し給へバおとゞ

いとろむりり上めれたたり人ぞろ涙ををませ世中を心うとのおもひたる

世に新詩集... 卷之五十一

をおやろけよのあらざめりかゝる心かぐらいたづらよかりなばおそろしくもある
りな云々とおやして(源松風)十なか／＼物おもひみたれてふいたればとみまもう
てかれをあまり上衆めりいとおやたり(紫式部家集)いりさりおもひぞおぬべ
き身をいといたるも上せめくりかといひけるを聞て「わりかゝや人こそ人といも
さらめみづからみをやおもひすつべき(源あかし)廿やんてとあき人よいたうおと
るまどう上せめたり(同桐壺)四おやえいとやむてとかく上せめりいけれど○眞
淵云今昔物語古本ニ貴人ヲ上衆賤ヲ下衆ト書タリ時ノ俗語ナリ
おやくとり酌取盛衰卅九酌とりよひるの女をいたして
おやくてん釋奠枕七おやくてんもいりからんくゝなどいりけ奉りてする事なる
べい

おやくまく(新古)釋教 日藏上人 「寂莫の苔此岩戸のいづけきよ涙のあめのふらぬ日ぞ
おれ

おやけ邪氣源浮舟五十れいの御下やけの久くおこらせたまさりつるを

おやくくひ(著聞)十六おやくくひをかきて相撲をとり
けり

おやめん 赦免(後漢書)六十董卓傳先遣使長安求乞赦免

おまる 結(續紀)一務結而(詔詞解)一ノ例多シ(古事記)清寧天皇おなきみのみ
このおまがきやふとまりおまりもとろ

おま風(金葉)戀上 惟規 「島風よそたつ浪の立ちへり恨てもおまこのまるりな
(壬二)上 「島風のあゝの葉おたる夕暮よみぎそのたづもこゑかよふなり

おまのこウラシマノ子ナリ(實方集)内の女さうとをへたて、物いふよこれ明給へといへば
さらぬものをといふいらへよ「おまこれが心ゆるさぬ玉くけあくれどありぬ物
よどありける(和泉式部集)下てお置たるをやるとして「あふことを今いたのまぬ
中かれとまそこをあけねおまこれがそこ

おまく(夫)卅三 西行 「くれ舟よあさづまおたりけさかせをいふおのたけよ雪おまく也
島好(伊勢物)八段

おまこのむ島好 「伊勢物」七十三條のおまみゆきせし時紀の國の千里お瀆ありぬ
るいと面白き石奉れりきおまみゆけの後奉れりいりば或人のみさうのまへのみ
ぞよおたりいを島このみ給ふ君なり此石を奉らんと給ひて(万)廿六屬目山

齋作歌三首「をいのそむ君が此おまけふればあゝびの花もさけよけるりも○廣
足云島の庭かる事略解玉勝間などよくそい

忘まき(夫)四土御門院小宰相「海りけてひら山おろし行りへり花れ忘まきの浪たりく見ゆ
(万代)戀三長方「忘まきふくひゞき此かたの舟をたり心まどふもたれよよりてり

忘まきの風(中務集)三門さゝぞ和泉守順朝臣のかたをへたてゝあるよ梅をこかた
の人いりてとりたりといふをきゝて梅をやりたれば順「るせ況よもさむら水の
もる時へまへの梅さへのこらざりけり返し「井堰よもさむらでいうでもりつらん
す況のふるこひこひもあへぬよ又順「いづこよと和泉守あらぬまが況の島ちりみ
波のこえつゝもるとこそきけ又返「うちこゆる波のおとせばもらぬより忘まきの
風ぞ吹かへさるゝ(山家)上「せとこさるたかゝし小舟こゝろせよあられみたる
る忘まきよこぎる

忘まひこ(夫)廿八顯仲「忘まひこの忘けみよとへる青づゝらくるしきものいゆふされ
のこひ

忘けいと(夫)卅三衣笠「我戀のいづれ忘けいとくりかねていりなるふしよおもひ
たつらん(和名)十四十六結絲、説文云結、惡絲也漢語鈔云之介(金葉)戀下「こが戀の
いづの忘けいとすぢよこみよえまのおやくくるのそくか

忘けり(源)東や初つくを山をこけみまほしき御心のありながら山の一けり迄あ

ながちよおもひいらんも(狹)三上大将僧おぼろけあらぬ志のそとよけよこそ

と山此一けりもささる所を況とさし侍りけれ(源)蓬生五あさぢの庭のおもゝみえ

を忘けり(伊勢物)九段つたりへぞの忘けり(中務集)廿七「夏山此忘けりをこけて鳴

鹿をいりてともいの人たづぬらん(更科日記)「わけてとふ心のそとのみゆるりか

こかけをぐらき夏此一けりを(万代)夏經衛「かそべある松此一けりのなつ衣かさぬ

をかりし風ぞふさける(同)秋上好忠「夏を況のをふのけりをみる時ぞ秋來よけりと

そぞもいらるゝ

忘けりて(枕)七九お前の草此一と高さをなぞり是の忘けりて侍るをらひせてこそと

いひつれば

忘けりあふ(源)こてふ九おまへのこりかへでかし木などの青やかよ忘けりあひ

さるが(古)大所「神が況のみむろ此やまの榊葉の神のみまへよけりあひよけり

重之集(重之集)九「山さくらちりゆくをる此木のいたいまつもみえぬよ忘けりあひよ

けり

忘けぬく(万代)三隆祐「船人のまりぢ忘けぬく手をさむみ沖よゆられてあけぬ

此よ

忘々く(源 桐つは)五源氏の君の御あたりさり給おぬをまゝしていけくとたらせ給ふ

御方のえもちあへ給おせ(伊勢物)五人いけくもあらねどさびりさなりければ(源

夕かは)三とかり忘けくとぐむる里人おそく侍らん(同 帝木)六あれたる家の露

忘けれをお分めて(同 蓬生)五忘々草蓬をたよかき拂もん物ともおもひよりたま

おせ

忘け山(拾)雜戀よみ「世中のいりゝのせま忘け山此青葉の杉れあるたよな

忘けき(源 關屋)五「あふ坂此關やいりなる關なれば忘けきなけき此中をこくらん

(蜻蛉日記)上「おもふてふ我ことのをあた人のいけきなけきよそへてうらむか

(源 橋姫)七みちもみえぬ忘けき此中をこけ給ふ(六帖)上「ことから山一た水

となりな、ん人め忘けれの中もゆくべく(源 紅葉賀)十ほのみ給ふつけてもおも

やすこと忘けかりけり

補 忘けみ(月清)一「そを野よいまこそすら小鷹狩山いけみ雀りさよる

(續後拾)匡房「やへむくら忘けみ下結ふてふおぞろ此いみづ夏もいられせ

忘け(源 夕顔)四十内より御使雨の足よりもけ忘け(同 夕露)七十おぞなけ

く事忘け(源 夕顔)四十内より御使雨の足よりもけ忘け(同 夕露)七十おぞなけ

帝木) 四十人めいけからん所よびんかきふるまひやあらされん

忘(枕)四ありかたき物物語り集をお書うつはらん墨つけぬ事(源 浮舟)九韻

ふさ忘べき集どもえり出てこなたなるづいつむべき事あどの給おせて云々

(同 柳)四十さるべき忘どもあまたもたせて参り給へり殿もふあけさせて

云々めづらき古集の故あからぬそこいえり出させ給ひて

忘(執 心)源(源 幻)十をべていりなる方よても此世よ忘あとまるべき事なと心

づかひをせいま(同 目のな)下七物ノケ詞猶みづからつらいと思ひ聞えい心れいふ

なんとまる物なりける(和泉式部續集)下人のもとより万葉集忘をとあると云々

「うだながらながらふるたよあるものをなよ、此世よ忘あもとめん(源 柏木)六

うらなひよりけん女のりやうこを誠よさる御いふの身よそひさるならを云々

忘(源 若紫)十いぬる十よ日のほどより(同)十うせてこの十よ年よやなり侍ぬ

らん(榮 花山)卅むらかみなどの二十人のようをみやすところおもせいりと

(同 月の宴)五十女さうの十廿人といでるてそとこらふぞや(源 櫻標)廿こらのを

るとんを給おり給はる云々たけすがさとのひうつくいけよて十人さまことよ今

めりいう見ゆ

志ふよひとへ(盛衰)四十三やよひの末れことされ藤がさねの十二ひとへの御衣をめされたり

補志ぶとき(著聞)此ものいふと記をこのものよて(宇治拾)十二ゆゝく大なるむさゝびの年ふり毛などおけ志ぶとけなるよてぞ侍りける

志ぶり(空穂 藏開)上六。アテ宮ノ「左衛門督をともいたく志ぶり」を制一の給ひかどしておとゞの給へるぞり(とりかへせや)ニをりくゝの御遊び志ぶりか

くしたるねを心まいれてふきたてたる雲井をこけひゞきのせりをゞろさむくおもしろき事いもんかたか(補)著聞使いぶるけしきながらもてかへりけり

志ぶり(夫)廿九「世中の秋まなりゆく若栗の志ぶり」を志みてぞ終なん強。志ひ(源わか)上四御使まも女房してかもらけさし出させ給ひて志ひ

させ給ふ(四條大納言集)「いまよりの思ふことをもいもでへん志ふる」つら記ものよぞありける(万)十二「いなといへど志ふる志ひのが志ひがたりこのをろきり

でこれ戀まけり(万)十四云々これ志ひめやも君が來まさぬ(源松風)卅此をきものどものたづねきていといたりいひとゞめいひりされて

志ぶられて(宇治拾)七内へ逃て志とみのもとをさきよとさみて前の谷へをどりお

つ志とみ風志ぶられて谷のそこは鳥のゐるやうにやをら落まければそれより逃ていよけり

志ぶねさ(執念)源藤のうらは七今ひとたび見奉る世もやと命をさへ志ぶねうをてねんとけるを(同)源標四さねが志ぶねさ所つれてものゑんと志たまへるが中

中あいぎやうつれて(同)空蟬九かく志ぶねさ人のありがたき物をとおせし(同)藤裏葉初宰相の中將のかがめがちよてそれとしき心ちるをかつのあや

くわが心ながら志ぶねさぞり(宇治拾)十一しやけくしていくやつりなど志ぶねくそりかゝりて來まければ(源胡蝶)十かれの志ぶねくをゞめてまよりまける

こそ(注)度々返シタルヲ御使ガシフヲクトマンテイニタルト也(同)手習七いりで志なんぞと思ひわたり給へどさばかりよていさとまりたる人の命なればいと志ぶ

ねくてやうくかいらもたけ給へばものまゐりなど給まぞ(枕)十二いと志うねき御ものけし侍めるを(補)源手習二あやこれ誰ぞと志ぶねけをるこそよ

て見おこせたる

志ぶらん(瀆松)三ノせめて志ぶらんもさをりよていよのつねびうたてければとさり給ひてかばりうき身の名でりなれば云々

あふらせ給ふ(枕)六宮の平らせ給ふべき御使はて馬の内侍のせけ参り給へり今宵
のえをさあふらせ給ふを父母へノ禮也殿さくせ給ひていとあるまじき事云々(瀆松)廿四
車よりおりてあふりたるらんもあやかるべければ

あふらす(蜻蛉日記)中、いりよせんこたみのよよふらさべくも物せしと思ひさこ
ぐすよ

あぶく(夫)四、後鳥羽院「花さそふひら山おろしあらければ櫻よふくさぐらふね

(新古)冬、家經「高瀬舟あぶくさかりは紅葉の流れてくごる大井川うが(注)シキル心

カ(清輔集)「霜がれのあしまよふくつり舟や心もゆりぬこが身おるらん(補)天
延三年一條大納言家歌合)「くれなるよふかくよふへる梅花あめさへいろをふり

ぞいぶける

あぶく(夫)二、權中納言長方卿「鶯のこゑまたあぶくきこゆかりをたちのをの、春のあけ

甲の(百鍊抄)十四、廿六、神殿御戸不被開元日七日安平被開了今日澁固有其恐事也

あふまんおくのくよ十萬億(源わのき)上、八西の方十萬億の國へたてたる九品のう
への、ぞみうたぐひなく

あぶく(源東や)二十かの殿よの我もく、聳とり奉らんと申所く、侍るをればこ、

よあぶくなる御けさひあらははかさまよもおなりなりなん(宇治拾)十五、只なれ
とありければ童あぶく、小法師となりまけり(源松風)九、あぶく、よるざり出て

(同わか紫)五、四十女君れいのあぶく、よ心もとけせもの、給ふ(うつは)國讓)上、四つ
つみていり給ひせ云々御わらうたさし出給へいとよぶく、よ入り給ひて(蜻蛉

日記)上、めのとなくともとてあぶく、なるものあゆみきて聞えさてそのさりから
ぞりへりぬ(補)宇治拾)十一、いりざらむも又心しられぬさまなればあぶく、よいぬ

(枕)十三、わりなくあぶく、よおきがたけあるを(源胡蝶)廿、御りへりとくと聞ゆれ
ばあぶく、よ見給ふ(落く布)一、あぶく、よとりてあこぎよ御文とて引出されば

あふもト、十文字(土佐日記)上ありとあるかみしもこらひまであひあれて一もトを
たよあらぬもの、が足を十もトよふとてぞあそぶ(古事談)六、かそらけ二をうちあ

もせて黄色紙捻りて十文字よからけたるを

あふせ(狭)二、上ノ、大宮ノ子生せ玉フあるよもあらでふさせ給へる大宮を子持の
やうよよろづよふせ奉りて姫宮をば苦しうせさせ給ふとていと奥ふりうおそ

まさせて(補)宇治拾)九、廿一、さだく、をるやうよあふせて

あこ布と、ぎれ(万)八、うれたきやあこ布と、ぎすありときのうらりあしきよお

へどく(同)十ノ「うれたきやこをどぎをいまこそのおとのかるりよきなき
とよまめ

補 志こつおきか (万)十七ノたぶれさる志こつおきなのことなよもせれよ告ぎ

補 志このみたて (万)廿八ノ「けふよりのかへりみかくておそきみのこのみたて
といでたつせれり

志こ草(万)廿四ノ「すれ草かきも志みよる志たれど志このこ草猶こひまけり

志こめ(神代紀)上ノ醜女此云志許賣

志こめ(源浮舟)三ノあーがきこめたる西おもてををををここがちていりぬ

志こ(玉葉)神祇云々幣参らんとて云々「かこまる志こよ涙此かゝる哉またいつ
りいとおもふあそれよ(古事記)上ノ(注)訓垂云志殿(續千)戀二寄四手戀と「さり

犯葉よかみのゆふいでかけてたよつれなきいろをえやいのらん(新古)神祇
「神風やとよみてぐらよなびく志でりけてあふぐといふもかここ(同)同
ろ人のねがひをみつれ瀆風よこゝろをさしきいでれおとりを(拾玉)六「さむけ

りもをりから神もめぐむらん志こ風ふく有明のそら(同)二「神りきやいで吹風
よさをいれて雲るよなびくあさくらのこ志(新古)神祇入道前關「けふまつる神の

心やなびくらん志こ波さつさなれ河風

志(枕)七ノ女房やさふらひ給ふとこ志こいへ(同)十一さよけある御さ

まどもいで打ゑみて見給も(同)六御おくりいでみあかへりよけり(同)四いりてま

りでかんどいふこと草をいで出て(同)三けよ其いろよりいであいかく見ゆるを

志(常イフ)源(源)十中將の君いで聞え給ふ(同)柏木十さるべき人いでつたへ

奏せさせ給けれ(同)さわらひ十をりけなるをらいのをきりけすのをゆるいで

御せうをこ聞え給へれ(同)寄生五十人いできおえ出給へるをさくよ(同)夕か

は)五十櫛扇おろくいでぬさなごさどがましくて(同)四十小君いで志よりへり

おもふ心の志り給へりやといひつかえ(古)序春れ花匂ひをくかくいでむあしき

名のみ秋のよれながきをかこてれば(枕)二ノ女車へノ使いそとくよをひいで車の

もどよあゆみよるをかつい笑ひ給ふ(源)あふひ卅わか君の御めのと宰相の君いで

哥云々(同)玉葛十法師のせめてこよとさまはしくいでかいらり犯ありく(三

代實録)七十三中臣朝臣逸志之禱申給也

志(心)源(源)卅心こづりきさまいで参り給へり(同)東屋卅少將と二人い

ていとをいがるほどよ(古)戀二「ひとりいで物をおもへば秋のよのいさをのそよ

といふ人のなき(伊勢物)初段あるよし、てかりよいしけり(元真集)十春つくしよて
歌よみあまたしてよむ補(風雅)内親王雜中、式子「とりやとまつま木こりゆく山賤の
さしむかよふあとさりりして(同)久時雜下「かひつもるもくづのみしてあるりひもあ
ぎさよよするわりのうらなと

志でうつ(後拾)秋下伊勢大輔勢大輔「さよふねて衣しでうつこゑにけいそがぬ人も終られざ
りけり一本心して〇八雲よ云志でうつハハけくうつ也後頼説奥儀抄志づりようつ
なり(拾玉)「一づのめぐ秋風志のお松がねまころも志でうつゆふぐれの空瀆濱臣

云古事記日本紀等垂の字を志でとよめりたれの約て也意通す(壬二)中「山風よ
初霜りけてあろたへれ衣しでうつ志づの神人(拾玉)「一月りけまころもしでうつ
音さえて鹿なきあけ秋のやまさと(月清)「よもをがら月よしでうつから衣を
らまではめるつちれおとら

志でのたをさ(榮)御着裳十「さかへとるをりよもなくとゞぎは志でのたをさ
とうべもいふなり(夫)七惠重「とさなへもうゑ時をぐるをさなれやしでれたをさの
こゑとやめたり(催馬樂)妹が門や云々ひち笠れくあめもやふらん志でをさ
(伊勢物)四十「かのみたつ志でのたをさいけさぞなくいなりあまたとうとまれぬ
三段

れバ「いなりおさきしでのたをさの猶たのむとが住里よとゑい(源蜻蛉)

九「忍びねやきみもかくらんかひもなきしでれたをさよ心りよとゞ(古)誹諧敏行「い

くさくれ田をつくれさり郭公しでのたをさをあさかすよ補(信明集)「こよひ
こそしでのたをさも聞つらめ今の五月れ空よしられん

志でのやま(袖中抄)綺語抄云とゞぎはをいふ〇或書云郭公ハシデノ山ヨリワラ
ハニテクル也シデノ山コユル間田ナド作ル故ニシデノタチサトハイヒツタヘタリ

無名、奥儀、童蒙抄、同シ慥ニナラヌコニヤ(長能集)「とび人の心をそこかため
てんしでれ山ちもやすくこゆべき(古)戀五兵衛「志での山ふもとをみてぞかへりな

つらき人より先こえととて(蜻蛉日記)中「露しけき道といひりしでの山かつか
つぬる、袖いりよせん(源幻)廿「しでの山こえよ一人をいさふとて跡をみつゝも

なすまどふりか(四季物)四月「今よりの志での山こそいそがる、せめてもおおの
あとをつぐやと(十王經)死天山門集鬼神云拾(哀傷)伊勢志「志でれ山こえてきつらん

不とゞぎすこひしけひとのうへかたらなん(後)雜二よみ「しでの山たどるくゝも
こえか、んうれ世れ中よ何りへりけん

志で、(拾)神樂「いそれりみふるやをとこのたちもがなくみれをしで、宮ぢのよ

そむ(命) 四十人々(源わかし)のいなまでたびのさうぞくめづら(源わかし)きさまなりい
 つのまよりあへけんどもえたり(源わかし) 修(源わかし)行(源わかし)ありきて(更科日記)此をのこ出入(源わかし)あり
 志ありき(金葉)上(雜)とひさ(源わかし)く修行(源わかし)ありきて(更科日記)此をのこ出入(源わかし)あり
 くをおくのりさるともかどかくありりるぞとふなれ(落窪)二暮ぬれば御
 たい参りかとしてたちを死あるとたちて志ありく(同)二おもふことなげまていあ
 りく(宇治拾)十一これのみなら申京中をいあり死てぬををして死けり(大和
 物(六遍昭)京よもかよひてなん志あり死ける(伊勢物)五(六十)かくいあり死つゝ人の
 國(六遍昭)ありきてかくうたふ(源すま)五(卅)不こりりよもてなしてつれを死さまよあり
 く(同行幸)九(廿)ころざしをいたして宮仕へいあり死て(枕)十一陰陽師のもとある
 わらとべこそいみづくものいりたれ(云)白き水いりけさせよとゆいぬよあり
 くさまの例いりいさかあうよものいせぬこそうらやまいけれ(宇治拾)三(二)庭
 此雀れいありきけるををらせば石をとりてうちたればあたりて腰をうちをられ
 けり(同)十三(廿二)たぐものいゆりけれバ物見よ志あり死ければ所々みゆきけり(同)
 六(鷹)をのめぐりよありく(大鏡)五父おと具してこそありき給ふなれ(右京

大夫集) 七十またらかる犬のたけれたいのもとなどいありくり(云々)うつ(俊蔭)

一(四)かくいありきてとよく(同)七(女)よろづ志ありきてそのをりの事を
 みないいでつ

志あぞふ(伊勢物)一(段)十夜ひとよ酒のみあそびてよあけゆてゆく(源わかし)

志あつりふ(宇治拾)七(五)不とくいささまよゆればまことよさわぎまひていあ
 つりふをみて(同)四(十)きらんとするものといあつりひて(同)十一(四)それきらんとする

あしの上のりりて此足のかそりよこが足をきれ(云々)おうくとおも死ければさ
 らんとするものさもいあつりひて

志あつめ(源わかし)十のこりのよとひつむべきいねのくら町ともなを折々所よつ
 けたる見所ありていあつめたり(同)四(浮舟)六十つれなる月日をへてはりかくい

あつめ給へるてならひなどをやり給ふおめりとおもふ

志あやまり(源みゆき)八(廿)かくいふよつけてもけよあやまりたることおもへバ
 志あやまち(落く)一いなる事をりきこめいさるぞさらよあやまちせさせ
 給へることおとよまさめめるを

志さい(子細)五(宇治拾)八何事よよりてさふらふぞ子細を申せと仰られければ(同)五

一事の子細いそせてきりせんとて(源 帶木)廿そのこゝもかんさいいな死もの侍
めると申せば(朝野羣載)廿大宋國商客事云々任先例子細言上如件

志さる(兼輔集)十三「みちのくは白川こえてあひくつさるくもゆけど
そるけき

志ささぎ(源 楨柱)十八修法なごささぎと御ものへけちたたくおこりて(同 まつ風)
廿まわりなる御あるト志さわぎて

志さん(著聞)十六、あまりは學問をして四季をたよりらぬやさささいふさたよこ
そのりて候へと自讃しければ

志さく(うつろ 祭の使)廿おろやけのささきこめさきとてまらせ文人八十余人
仁壽殿は參るべきを云々例よりも興あるべきささきかあるべきをたゞまごさト

(同)廿れいより興あるささくなるをえ見過はましくおもすえつるを
志さま(源 帶木)廿さるべきものつねよりもこゝろとゞめたるいろあひさまいと

あらまろくして(同 玉萬)廿四いろあひさまなどことなるをとえらせ給へれば(同 寄生)
五廿ものささまなどをささよらをつくり給へりける

志さして(宇治拾)十二陰陽師こゝろえぞ仰天して祓をさしてこれいりよとい

ふ

志さそ(源 浮舟)十六右近いと終ふたし云々つとめてのそとよもこれいぬひてん云々

しさいたるものさもと具して木丁よろちうけをさしてうたゝねのさまよりふ
しぬ

志さ(式 千載)序 宇治山の僧喜撰といひけるなん云々やまとうたの式をつくれりけ
る云々(嘉喜門院集)正平廿三年五月五日とトのささまをさおろしめしけん(同)

つぎの日よべのささまと申されたり御りへりことこのついでよ
志さ(榮 もの 車)四十姫ぎみの御くしの箱の有けるを主上の御もとよからせ給ふ

とてそのまこれささま大納言さのかへせ給ふ(今物語)御沓のささまちざりをり、
れたりけるをみて「くつのうらよもとぶちどりかといひてたてりけるをとりつ

ぐ殿上人も物もいとざりけるよおろいさの志を御沓をま給給ひて「なまはるる
あいの入江をおもひいで、と仰せられたりける(落く)三かゞみのささまをおろ

へしてか給給ふ(同)末。まははがこのきもささささまをさして底よりける
ものをみるよむけよおちくすのささまの手なれば

志さ(職 枕)七、志さの御さうりのたつみのさまの云々(同)九月十日志さの御さ

うゝよてせさせ給ふ

あき 食(空穂 俊蔭)上、あはらの食とせよとあてられたり

あきり 尻切全浙兵制ニ女鞋ヲシキリトモユンゴトモ見ユ(下學集)尻切ト見ユ

あけり羽の矢(新勅) 物名、あけり羽の矢といふことを人のよませ侍りける、鴨光兼

あけり(る)(白文) 十一ノ連様四人下官(榮 玉のむら菊)一よろこびの御せうそこあま

りあるまであけりよきこえさせ給ふ(源 桐つは)五 まうのやり給ふもあまうち

あけるをりく(榮 月の宴)八内よりの御使よるひるよりあけりて参りつゞき

さり(源 ありし)六 卅そのとーおそやけよもの、さどーあけりてものさどがけりこと

おそり(蜻蛉日記)上、つこもりがたよーあけりて二夜をりみえぬそふみさりり

ある(同)上、かゝるよ中將よや三位よやそよろこびをさきりさる人の所々ある

いとさどがけりければ(源 わか紫)九 廿とく参り給ふべき御使さきれそおもそもた、

せ(狭)上八、あまり打あけるひどりねいといふめあそおひつゞけられ給ふ事

おそりる中よ(源 明石)十 京よりもちきりたる御とふらひとめたゆみかくお

そり(著聞)卅一、あけりよたけたりき女とことよたけひきりけるをど(同)

十二、只ちやくびをされとーあけりよいひければ(東三條院瞿麥合)一松むのあけり

し聲れきこゆるのちとせりさぬる心かりけり(瀆松)下、うちよりさきりよめーあれ

バ(土佐日記)上、その日あけりよどりくしての、ーるうちよ夜ふけぬ(源 東や)四十

たびくーあけりてまで給ふことハ

あけがみ(詞花) 春 太皇太后宮賀茂のいつきときこえ給ける時 云々 硯のふたよ雪を

入て出されたりけるさきがみよりあけつけ侍りける 攝津

あきりみ 式神(新猿樂記)仕式神造府臣(宇治拾)十七、此少將の上よ鳥の飛てどそり

けるりあきをさけりけるを晴明きとみて 云々 さきさうてけるよりこの鳥のあけり

とよこそありけれとおもふ(同)八、陰陽師をかたらひてさきをふせたりけるなり

あき(宇治拾) 十八、御ためよ仰をそむかトとてあけふせてそでよあけ神々へりておの

れたゞいまあきさうて、死侍りぬ○玉勝間よ云宇治拾遺物語よ式神をつりふとい

ふ事あり今れいつかのとくなるさざと聞えたり此わざをもてたちまちよ人を殺

すよーかどあり

○あき神(枕)九、おそこれさりりいけいおそさせ給へあけの神もおのづ

からいとりこーとて

あきたい 式代。 追従ナドイフ心カナベテハ(著聞)十六、おもしろう候ひつるものり

禮ヲナル心ニ用サテアリ

かど志き代りたりけるを(盛衰)七あながち驚おぼしめをべりらむなんどい代
 ければ入道もさこそ存つれとどのたまひける(沙石)七上七十といふよりも六十
 といへばこそいささ心ちしてかくいひける人の常の心かり色代も御といより
 るもるりさうく見え給ふといふはうれしくこと此外も老てこそ見え給へといへば
 心やそくそいなれ人との心かり(同)七下ある人妻をおくりけるが雨のふりられ
 ば色代も雨ふれば留り給へといふをそよ出たちて出つゝかくと詠けける「ふら
 さふれふらぎのふらぎふらぎとてぬれでゆくべきそであらばこそ(盛衰)三雲の上
 人御前も侍てめでたけ御事と色代申て(同)九十一一定皇子までぞおそしまさんとて
 よみ人も色代申けり(沙石)三下よの常は風情のいみづくなど色代をる事よこそ侍
 るよ(梁塵秘抄口傳集)又承らんと申てかく感申よ色代してすめのゝる
 志きたへ(忠峯集)廿「ひとりぬるをけしきたへけしそがまのうき玉なれやよるり
 たもかゝ

補 志けたつる (新古) 神祇 西行 「宮をいら志たついそねよけたてゝ露もくもらぬ日
 の御影りな

志きたつ澤 地名にあらずいづくもあわれ(拾玉)六「あがむればかきりぎりあきあ
 澤邊のしぎのたつといふあり

それらさしきたつ澤のありあけの月(新古)秋上 西行 「心をき身も哀の志られけり鳴
 たつ澤は秋のゆふぐれ(拾玉)三「旅枕よとれあそれももゝとがけしきたつ野べの
 ありつきの空

志きれ 尻切の條 に出す

志きなみ(六帖)五(万)三「一日のちへしきなみよおもへどもかぞへ此玉のてよ
 志きたつ(平治)上 内裏より類並よめしければ(夫)二光俊 「瀆なとるあらいそれを

のしきなみよおひとめがたき春のわりぐさ(素性集)五「松山は水のり老ともおも
 不えせこひしき君よしきなみぞたつ(中務集)五三十一「よそよのみあふみのうみとか
 ひかくてこひしきなみぞ立たりける(同)「ひひなくてありしの浦はあきりせよ

こひしきなみぞ立たりける(新猿樂記)艶書來如鋪波(枕)五殿上人の云々扇や何
 やと拍子よしてつりさまされしきなみぞたつといふうたをうたひて(同)二ノ志
 きかみよつとひたる車のおくよかんたれば出べきりたもな一只をこしきよてり

へりかんとしつるを(蜻蛉日記)中「ものりたの水ぎそよ車たてよりみなおろした
 れば志きなみよよせてあぞりよいなしといひふるしたるりひもあり(垂仁紀)八是

神風伊勢國則常世之浪重浪 歸國也(寛平歌合)「さびわたるをが身のうらとをれ

まを戀しきことのしき浪またつ(玉葉)神祇俊成「まをかるとまたれみをりけしすみよ
しれ松もや今のおもひすつらん(拾愚)上「こたつ海よよせてりりへるしきなとの
まどめももてるる人ぞなき(玉葉)賀「こさつみよよせてりりへるしきかみの
りきりたりのき君が御代りか(新千)慶賀後京極「筵田れいつぬき川のしき浪よむれる
る鶴の万代のこゑ

まきぬ(孝徳紀)一座をシキ井と訓を

まぎのそねがき(古)戀五よみ八しらす「曉のしきののはねがきも、まがき君がこぬよの我ぞ

りぞかく(拾)戀二(貫之集)六「も、まがきは終りく鳴もまがきとくあしとまびしき

かぢのまさらト新續古雜下法印顯詮「身れおもひしけきねざめ聞まびぬありつき

まどれしぎのそねがき(万代)雜一「たれりまたありつきまどま寐ざめりて羽ねり

く鳴の聲をさく哉(同)同土御門院「ありつきの鳴のそねがきかきもあへトまがきも

ふことれかぢをあらせバ(同)同式子内親王「みのうさをおもひくたれバまぢ、めの霧間

まむせぶしきの羽がき(拾玉)五「夕さればうづらよなれてまむる野のよまぢおも

ひのまぎのそねがき(散木)三「あけやのようたれくろよりたつ鳴のそねりくおと

や万代のりぞ(小大君集)「そらよこそつらさかぢりけかましぎのも、まがきよ

まぎやしぬらん(月清)三「曉のしぎの羽おとし時雨よてまぢし、のやし月ぞもり

くる(元眞集)「まびぬれありつきりけてかへりたる鳴のそねがき我ぞかぢりく

(六帖)六「ありつきたしぎのそねがきも、まがきかきあつめてまびりりける

(万代)後鳥羽院「まびしこそ明ぬるりとも恨みしりまたバぞ今いまぎのそねがき(新

後撰)戀三「まぢまびてこぬよむあしくあけゆけバ泪りぞそふ鳴のそねがき(万

代)俊頼「いとましく旅ねの床れつゆけれは鳴れそねがきなみたそふあり

まぎのる(金葉)春國基「鳴のるる野澤れをたをうちりへしたねまきてけりま

めもへて見ゆ垣安の池之万を同

まきやみ(人丸集)三「まきやみれ道のつ、みれかくれぬのゆくへもまらまどわり

まきまけ(新猿樂記)種蒔苗代耕作播殖之營

まきみ(狭)四上御せ、ハ脇息ようちりけられてまきみのりれまなやりなるまき

まど、のうつりがともよもてまやされてあそれまなつりしきまも(万)廿五「おく

山のしきみのまぢかのことやしく、きみよこひまたりなん(源わ前)下九こ

まきまびの紙よてしきまよさし給へる(同)總角三しきみのいとまをやりまかぢれ

る匂ひも補(月清)一「山寺此おくの通路きてみれば嶺のしきみのもどつ葉もな
(壬二)下「麻衣またおもなれぬおく山のしきみ花の露よぬれつ」(拾玉)「あさ
まゝやちりのゆくをなをゝゝむまゝしきみもつまむありもくまれせ(玉葉)釋教
後鳥羽院
「さながらや佛のまかまたをらまゝあさみのえたよふれるゝら雪(新千)釋教
清水よ
こもりさりけるよ云々あさみの葉よかきつけてつりさしける(新古)雜中
小侍從「權つ
ひ山路の露よぬれよけり曉おさし墨染の袖

あさみ推古紀十越摺則立行

あさうつ一藏開上二四中納言の君紙もがなとの給へばきさみたるあさ一ま
さ白きあさ一一巻硯箱のふたよいれて出されけり(源橋姫)三あろきあさのあつ

でえたるよ同御返あろきあさ一哥云々(朗詠)馬青苔色紙敷行書(風雅)下
加茂の重保が堂此障子よ時のうたよみどもの形をかきて各よみたる哥を色紙がと

よかくべきよ一申侍れば(明月記)文曆二年五月二十七日云々嗟峨中院障子色紙形
故予可書之旨彼入道懇切源梅かえ十六又こ、れくむやのあさ一の色あひ花や
かるよ

あさ職事(狹)上一家司職事ともめ集て(續紀)廿一百官職事已上

あさ一ま(好忠集)四季戀雜の序あさ一まのまわれやいろのふもとかるを花く一かり

よれれ云々(榮御賀)三さまりさりたるいみトうめでた一あさ一まやこ一のこと
といみえせこまもろこ一よとまぞみえれる(續拾)春上後京極「おこなべてけさ
のかすみのあさ一まやまともろこ一春をるらん

あさ一まの道(千載)序敷あさ一まのみちもさりりよおこりて云々(玉葉)勢大輔あさ
あまのみちもたえぬべき事をいひつかさして侍りければ赤染衛門「八重むぐらたえ
ぬる道とみえしどかくれぬ人のかそとづねけり(同)同為相「これのみぞ人の國よ
りつたそらで神代をうけしあさ一まのま(夫)廿六「苔の下ようづまぬ名をバの
こせせもそりなのみちやあさ一まの哥

あゆ(枕)十六俱舎のあゆをそ一いひつゞけありくこそ所よつけてをか一けれ

あゆ一て(枕)八其詩をあゆ一てくろと一殿上人いとおやくるたるを

補あゆぬり朱塗(瀆松)上た大たのてうど一ありさよあゆぬりたるさまよて

あゆつぎよ出御(百鍊抄)四長徳三年十月一日旬出御南殿之間太宰府飛驒到來云々

あゆつか無術(山槐記)廿予衰老病後雜俊旁無術(古事談)一此事者理非顯然候未

断之條無術事候也(御記)治承四年四月廿三日云々藏人邦隆雖觸朝臺磐不昇窮窟無

術之故也

〔おゆらひ〕 入來 (園大曆) 大炊御門大納言入道同入來

〔おゆん〕 旬 (年中行事歌合) 殿中 一「もろ人のつらなる袖よかよふかりたまふあふぎの

風ものどけく〇旬と申いそべらぎのまつりことよのぞみ給ふ義也これの四月一日

の旬の事よて侍り夏冬の季のあらたまる始に臣下は御酒をたび政をきこしめを也

旬よいさまふの義あり内裏あたらしくつくられてもとめて南殿は出させおひ

まして政をおこかひるゝをば新所の旬と申位まつりせ給ひて政よのぞみ給ふを万

機の旬と申よや此四月の旬よ内侍扇をもちてかんだちめ給へばひざまづけう

けとるさやふかどあるよや

〔おゆう〕 主 (大和物) 四 此主なるみやを所けゝて〇文雄云字音よしゆうとのみい

へる此ころの常なり

〔おゆくん〕 主君 (枕) 八十一 此かりの主君よのおまへこそおそしませ

〔おゆるん〕 入院 (園大曆) 來月十八日入院 云々 被給旨稱大徳寺

〔おゆくまい〕 熟米 (盛衰) 十二、七條殿よてぐで参りたりし外の夕べもけさも御熟米を

たよも御覽といれさせ給そや

〔おゆこん〕 (盛衰) 四 師光の阿波の國の者種根のなる人なりけり

〔おゆぎよ〕 入御 (平治物) 廿七 待賢門より入御あるべきよて

〔おめ (宇治拾) 十 御まつりのさよめをるなりとてしめ引めぐらして (清正集) 一「ちそ

やふる神もおりよさゆふたすけしめのそよてかけかまなれを (金葉) 春 一「あら

をたまなぞ谷川をまりをらん引しめ繩よもりつゝぞゆく (同) 同 一「鳴のゐる野澤

の小田をうちかへしたね蒔てけりおめをへてみゆ (新古) 夏 攝政 一「小山田よ引しめな

そのうちをへてくちやいぬらんさみたれの頃

〔おめ (拾) 伊勢 一「うゑたてゝ君がおめゆふをかなれば玉とみえてやつゆもおくらん

〔後〕 夏よみ人 一「ふたさより我おめゆひし撫子の花の盛を人よをらそを (源 寄生) 廿

昔の人よ心をおめてし後 (同 浮舟) 卅一 いと哀れと人のおもひぬべきさまをしめ給へ

る人がら也 (同 さるき) 七 猶とまれる匂ひをかきかき人々の身よしめてあやまちも

いつべくめできこゆ (新古) 春上 一「春日野のくさのみどりよありしけりけりあつま

むとたれけりめけん (源 ちのほ) 十二 ころおめ奉らぬのか (人丸集) 二 (拾) 戀 下

「みいま江のたまえのあしをしめしよりおのがとぞおもふいまたからねと (拾) 下 雜

まゝを(万)^{十九}「けふのためとおもひておめい足引のをへのさくらかく咲よけり(小大君集)^廿「心を雲るとしめばあしたづのよもひとのみのおもささらま(源若菜)^{上七}この國のおくの郡も人もかよひがたくふかき山あるをどころもおめおきかぐら(万)^八「おでこのさだてありぬとひとはいへどどがおめいの花よあらめやも(同)^八「あすよりのさかまつまんとしめいぬまきのふもけふも雪のふりつ(源あらし)^{十五}「入道のらうとおめたるどころよ(夫)^{卅四}「おづかあるいなりをいめて入ぬればひとかたからぬ光をぞみる(源花の宴)^十やんごとさき御かたよものみ給ふとてこの戸口にいめ給へるあるべし〇この新釋は格子をあけて入通ふべき道のつま戸をいめたる也と解する例の誤也(金葉)^春「春雨のふりいむれどもうぐひその聲いをれぬものよぞありける

おめ(著聞)^{十三}「たゞいめおめまさりければそであわをふきていなんといけり
おめり(源梅かえ)^六此ゆふぐれのいめりよこゝろもん(注)春雨の夕也(同わかかな)
下よの火もかけいめりたるよ(同榎柱)^十いめりておさるいと心ぐるい御目のい
さうかさされたるぞそこのいれれど(同藤のうらみ)^三宰相もあそれる夕の
けしきよいとど打いめりてあまけなりと人々のさわぐよおなぐめ入て給へり

(同薄雲)^{卅四}うちいめりたる御匂ひとまりたるさへうとまゝくおさる(同竹川)^七
うちいめりておもふことありがふなり(同繪合)^二これの人さまもいたういめりて
づりいけよおとゞの御もてさしもやんごとさくよそをいければ(榮玉のむら菊)^十
御ものいけいとけたりくやんごとさきとひまていみとうかくさうさちみないめ
りてさふらふ(源總角)^{五十}打いめりぬれ給へる匂ひと(同少女)^{四十}世をおもひ
いめり給へれば(同梅枝)^十つれとどうちいめり給へるよといみとさき御なけれ
さなるよ(同あらし)^六やうく風をふりあめのあおめり星のひかりもみゆるよ
云々(神代紀)下衰(源はし姫)^廿かりぎぬすがたのいとぬれいめりたるよ(同野
分)^八あかつきがたは風をこしおめりてむら雨のやうよふりいづ(榮花山)^{卅七}いと
されをかいうおさせい人とおおぞえいみとらおめらせ給ひてたゞあべいよもあ
らぬなけれのみせさせ給へば(蜻蛉日記)下火おめりぬめりとしてありぬれば入て
うちふを程よ(同風雅)^{秋下永}「山けやよのまの霧のおめりよりまたおちやまぬ
木々の下露(新古)^{夏攝政太}「うちいめりあやめぞかをるよとぎすかくやさ月の
雨のゆふぐれ(瀆松)^上いといたういめりおとなしくおとまを
おめる(夫)^六為實「心さへいめるやよひのくれの雨をなともまたおつきもたのまで

〔彌〕拾愚上「くものゆくかたの沖やいぐるらんや、うけしめるあまのいさり火

〔山家〕上「いつとなくおもひまゆる我身かなあさまのけふりしめる夜もかく

〔忘めおと〕〔万〕十五「さふりらがいそふやしろのもみぢさもしめおはこえてちると

ふものを〔新古〕夏経信「さなへとる山田のうけひもりはけりひくしめなまよつゆぞ

こぞる、

〔補〕忘めら〔万〕十七長哥云々今日もしめらよこひつゝぞをる〔同〕十九あかねさそ

ひるの之賣良はあしびきのやつをどびこえぬを玉のよるのをがらよ〔同〕十七長哥

云々此夜すぐらよいもねぞよ今日もしめらよこひつゝぞをる

〔補〕忘めらひ〔散木〕「秋来てハ風ひやかなるくれもあるをあつさしめらひむつか

しの世や

〔忘めの布と〕〔源蓬生〕廿六對面し給ふ事なごいどりたけれどもちかきしめの布とよ

て大方よもよたり給ふよさしめのぞきなごし給ひつゝ

〔忘めのほか〕〔源神〕四かうしめの外よいもてなし給ひで〔蜻蛉日記〕下「たのみぢな

とがきをせさみあふひぐさしめの布かよもありといふなり〔實方集〕「たれからん

いとでのもりよことゝせんしめのほかよて我あかりけん〔源繪合〕十五「身こそかく

しめの布りかれそのりみのこゝろ此うちをわかれしもせせ

〔忘めのうち〕〔源あひせ〕十五「しめれうちいむりしあらぬこゝちして神代のこと

も今ぞこひしき〔右京大夫集〕十五「忘めのうちいみをもくたかせさくら花をしむこ

ころをかみよまりせて〔源葵〕二十「そりあしや人のかさせるあふひ故神のゆるし

けふをまちけるしめのうちよいとあるてをおぞしづれば〔補〕〔金〕連「忘めのうち

し杵の音こそ聞ゆなれいりある神のつくより有らん

〔忘めおく〕〔源若菜〕上七ふりき山あるを年頃も忘め置ながら

〔忘めやり〕〔源竹川〕初人のこゝろ時よのよるわざなりければささりいさひい

りめしくおせせしおとゞの御をどりよは云々おそりたのありさま引りへたるやう

し殿のうち忘めやりまかりゆく〔同〕〔帯木〕三つれととふりくらして忘めやりなる

宵にあめよ〔同〕〔東や〕四年廿三をかりの布とよて心をせしめやりよ〔同〕〔をどめ〕三

いとこめりしう忘めやりかまうつくしきさまし給へり〔同〕〔手習〕九つれととおこな

ひをのみしつゝいつとなく忘めやりかり〔同〕六十あめをどふりて忘めやりなる夜

〔同〕〔夕かは〕八冊寺々のそやもみなおこかひとていとしめやりかり〇契沖云徐深沈

日本 紀

【忘めやぎ】(落く布) 一つら杖をつきて不れてゐたるを少將いづとて見給ひてなごこ
れかりのいとうしめやぎたる物やうしなひたるとて笑ひ給ふ(源紅葉賀)十かく
御男などまうけ奉り給ひてのあるべりう忘めやうよてこそみえ奉らせ給はめ
【忘めて】(源 鈴虫) 十やうくさる御志をしめ給ひて(同 柳)七かすどまれるよ布ひな
さとりき人々の身しめてあやまちもいつべくめできこゆ(同 夕のほ)十女いいと
ものをあまりあるまでおぼしめたる御こゝろさまよて

【補】忘めさき(新拾)戀一 一かづらきやたうまの山よさすしめによそよのみやハこ
ひんとおもひー

【忘めゆふ】(万) 二ノ 一かゝらんとかねてしりせを大御舟をてしとまりしめゆふま
しを(同)廿 一さゞかみの大山守いたがためし山よ忘めゆふきみもまさなくよ(同)

三、四 一忘めゆひてごがさためてしをみのえれままの小松ハのちも我まつ(源 總角)
十一 一「をみかへしさける大野をふせぎつゝ心せをくやしめをゆふらん(夫)四正三位
知家卿

「たづねきて今ぞ忘めゆふたまたすき雲るる山れそつさくら花(伊勢集)九「うゑ
たて、君が忘めゆふ花なれば玉と見えてや露もおくらん
○補】そらよしめゆふ(新勅)戀一よみ「夢またよまたみぬ人のこひしきのそらよし

めゆふこゝちこそそれ(新千)戀一「かこつべきたよりたよかくくるしきのそらよ
忘めゆふおもひかりけり(同)戀二法 一うひなしや空よしめゆふ契よて身せう花雲
此おもひきえかば

【忘めと】(順集) 卅 一しぐれつゝうつろふとれば菊れいろを忘めととふる雨よざ
りける(源 わらな)上、五 忘めとと人目をくなれ宮の内のありさまよ(同 さかき)四
火たれやりそりよ光りて人けそくかく忘めとととして(同 總角)十 此御前ハ人けと
なくもてなして忘めととと物語りきこえ給ふ(補 狹)三 下 おもひなけくこゝろの中を
かくくしめとといひつゞけ給へるまねびつくすべうもあらせ(著聞)六ノ病者
馬助を見てさしも狂ひつるがしめととと忘づまりて

【忘めと】(万) 三 一ごぎもこよいなぬをみせつをそき山つものまつ原いつりしめさん
(同)卅三 一忘めひなば玉藻からさん家のいもが濱づとこそ何をしめさん(同)四
示佐稱、ナドアリテ見セシメンノ心也(玉葉)釋教 粉川の観音よまうで、云々 内陣
よりりく忘めし給ひけるとなん(源 わか)九 此浦よよせよとかさねて忘めをこと
の侍しりバ(續紀)廿 大神乃慈備示給幣流物奈犁(補)万十五 一まそかゞみかけてし
ぬべとまつりたそりたみのものを人よ忘めを(同)九 二つをらりし示たまへバ

之賣須奈(同)廿二 つをらりし示たまへバ

忘^三 白魚。紙虫(源^三之し姫)四十忘^三みといふ虫のをみりよかりてふるめださるかびくさ、かぐらあといきえぞ(新六)五「さてはまた忘^三みれすとり此昔ぶみそらへばちりとみるぞこひいき^補(拾玉)三「いりよせんみのり此塵をそらふよ忘^三みのをいへやかすのころらん(拾愚)上「おのづからうちおく文も月日へてあくれば忘^三みのをみりとぞなる

忘^三み^補む(源野分)十まことよしみてふりき所のなれ人よかん物せられける(拾玉)一「さみたれのふりいむ雲もあされなりはとふく秋の風からねども^補(拾愚)上「ふといたくおどろがしよ忘^三み入てうづもれりたる春の雪りな

忘^三み^水(古)戀三「笹れよよおく初霜のよをさむと忘^三みいつくともいろよ出めやも^補(好忠集)「忘^三み氷る木の根を床とならしつゝおこかふ人ぞとけともある(永久百首)俊頼「衣手のうをさや春此關からんこがみいといとゞみこりつゝ(述懐百首)俊成「忘^三みこりるすものとなり此かちこたりうちとねやらぬ世よこそありけれ(堀次)「ゆふくれいみぞれよしみやとけぬらむたるひづたひよしづくおつなり

(冷泉爲秀卿)「冬ふりきだそのみさりれあさあらしよやがてしみつく雲のまくりて〇信濃ニテ冬ニナリ寒ニナルヲナシミガクルトイヘリ又奥州ニテ氷豆腐ヲシミトウフトイヘリ蒟蒻モ同シ出羽ニテモイヘリ

忘^三み(永承六年五月五日殿上根合)古苗少納言源信房「さをどめの山田の忘^三みよおりさちていそけやさかへむろのそやわせ(壬二)中「さゝのそよ忘^三みつくしものよをへてのみ山もさやよ衣うつかり

忘^三み^二とる(狭)四^中日比ふる雪年のこりそくかうなるまよいとゞふりかさなりつゝきえやるべくもあらせ忘^三みわたるを見出し給ひても

忘^三み^水づ(清水)古^大哥「わが門のいたるれしみづ里とそと人しくまねばみくさおひけり(拾)秋^貫之「あふ坂の關れしみづよかけみえて今や引らんもち月の駒

忘^三み^水つく(源末つむ)六^冊手づから此ありそかをりきつけ匂いして見給ふよ云々さもやしみつりんとあやふくおもひ給へり^補(源東や)六^十りき御どちもの聞え給もんいふとよ忘^三みつくべくもあらぬを

^補忘^三み^水ら(壬二)冬^戀「こひをのみをがれねしのたふる雪の消たよやらせ山もしみら^一(万)十三^{廿一}ありねさけひるの之彌良爾ぬを玉のよるのをがらよ

^補忘^三み^水こりる(宇治拾)八^十身もきるよやうよ心もしみこりて

忘^三みて(とりりへそや)十五^ノひのくま川からば忘^三み水りへとも打いでつべくみな

みおくらるゝなりよもあみていとどおもふ人ありけり(貫之集)「雨おれどいぐ
きといへばくれかゝるよこのそれいみてちらぬ日のあゝ

あみ、(万)^{三、五、十四}長哥うち日さけ都あみ、よ里家のさそよあれども(同)^{十二、十四}「忘れ

草かたもあみ、ようゑたれど鬼のあこぐさ猶こひまなり(同)^{十一、十八}「大舟よあゝ荷

かりつみあみ、よもいもがこゝろよのりまれるかも(夫)^七「たねまたいむろの

早せせ生まけりおりたつ田子の雨もあみ、よ(散木)「たれきりんこせのさ山れ杉

のうれよ雨もあみ、よくきらかくかり(山家)^下「雪どくるあまゝよあたくりらさ

きの道ゆきまきあゝがらの山(壬二)^上「いりむりり田子れさ衣みいぶつたあめ

もあみ、よさなへ取らん(堀百)「をさゝ原あみ、よおけるあらつゆを秋いたえせ

ぬ玉とこそみれ(注)シミ、トハシゲキトイフ也但シラ、トカケル本モアリシラ

ラハシラノ、トイフ中略也(堀次)避暑「水のよゝあたりもあみ、よ吹すぐる風さへ

さゆる玉の井れ里(万)^{十一、十六}「家人の道もあみ、よかよへども吾待ともがつひこ

ぬりも〇あみ、よ繁々の略(万)^{十、十七}「みまくほりわがまちこひいあきそ花の枝

も思美三よ花さけよけり(同)^{十三、十七}藤原の都あみ、よ人のいもみちてあれども云々

大殿の砌あみ、よ露おきてなびけるそ花の(同)^{一、三}春山と之美佐備たてり

あみ、(つれく)十 さゝ入たる月の光もひときいあみ、よとみゆるぞうい

あ、(雄略紀)五 每獵大獲鳥獸將盡

あ、進士(空穂 嵯峨の院)九十 文をりせよりそとめてあゝより出たる人廿人ぎそう

あ、(肉(和名)三)玉篇云肉和名肌膚之肉也(著聞)十八、「ひたそへてとりごよあゝぬ

そまむきよあゝつたぬべきこゝちこそをれ

あ、(万代)八^{神祇よみ}「みの山よあゝよおひさる玉がいのとよれあかりよあふが

たれいさ

あ、(中務集) 田まもる家よあゝのそむをもいらせ終たり(寂蓮今物語)「此山

れあゝいりめいくみゆるりないりなる神のひろまへぞこの

あ、(源みゆき)廿 御手の昔たよありいをいとこりなうあゝりみゑりふりうつ

ようかたう書給へり(枕)十三 あゝりみたる髪よ葵つけさる〇チャミタルナ云(顯

宗紀)六 遁入播磨國縮見山石室(著聞)廿五 此時くちなそえよらてあゝかまりたり

なり

志々良ノ練貫中 志々良ノ練貫

〔補〕志々むら宇治拾

それ志々むらを食ふと毒る物の

獅子の中の虫(野守の鏡)序源有房云々又佛をぞ我法をぞ我弟子失ふべしとて獅子の中の虫此獅子をそむたたとへさせ給へり

〔志々ま(拾玉)〕

「うれみま志々まをたよもえこそせねおもひあまればひとりたれて(源末つむ)」十一「いくそたび君り志々まよまけぬらむ物ないひそといまぬ

のこよ〇契沖云無言進退兩説ノ中ニ無言ヲ用ベシ其故ハ小侍従ガ返哥ヨ其證明ヲカ也日本紀ニ捷邊進退ヲシママヒトヨミテシママト點シタル所アレド其儀カハレ

リ〇雅望考ルニ志々まトハ口ヲシマメナルヨリイロケルナルベシ〔補〕雲萍雜志云貴人よ志々まの御遊と云ハ人々つとひ給ひて談話の中よひと度の無言よて戯れ給ふ

をいふなり志々まの志々まる間といふことを畧音便の詞よて閑をまもるかり壺矢五寸乃至一尺を度としてものいふ時の鐘をうちならそと何某の物語せられ

ことあり今や此とぞ絶てなすとぞ〇廣足云此何某の物語いとおがつらな源氏よよりて作りたる説よのあらぬりよく考ふべし(定頼中納言家集)母うへのほりよこ

たり給ひて人よものいそぬおこかひよてひさしく對面したまそでかへり給ひてけふなんいとまあれたるときこえたまひけるよいそぬまるり給ひけるよ〇御杖云これやがて此志々まの事ならん

〔志々まひ(神武紀)〕

五山中嶮絶無復可行之路乃捷邊不知其所跋涉(垂仁紀)四俯仰喉咽進退而血泣(古事記)下匍匐進赴

〔志々ふくよち〕

四十九日(源夕顔)四十かの人此四十九日志のびてひえの法華堂よてことをがせさうぞくよりそとめてさるべきものどもこまりよ誦經などせさせ給ふ

(拾)物名す「秋風のよもれ山よりおのが志々ふくよちりぬるもみちかかへも(朝野羣載)二四十九日全滿今朝僧各販寺

〔志々こらり〕

(源若紫)二ツラハヤ志々こらりつる時うたて侍るをとくこそこころみさせ給ふ(梁塵秘抄口傳集)十おこりこちよわづらひて志々こらりて

ありけるよ

〔補〕志々め(落くち)

一北のりた御心よまりせてのべ志々め給ふ(榮見はてぬ夢)廿五

人のきぬそりまけたけのべ志々めせいせさせ給ふ(同)廿八そりまのたけりぎぬのそをまでのべ志々め給ひけるを(著聞)十八朝夕の御飯を日ころよりすこし志々

められ候て(同)十七廿九この法師おそれのへきたるけしきよておどかまりてす
まぞ(源みゆき)十七そ此御いきなりひをもひきまゝめ給ひてこそ(宇治拾)二五おろ
しりおもひ給へてなんりひを引おどめて候つる

補 ちゝめ (散木) 「もたれふまきひをむちゝめちゝめきてかゝまゝ死までよをぞ
うらむる

補 ちゝや よしや 同 (万)十一十五「おく山は真木の板戸をおひらきちゝやいでこね後
ひをよせむ(同)廿八「たまちも神もそれをばうつてこそちゝやいのちれをいれく
もな

補 ちひ 假字ガヘル (隆信集)「くらゐ山のなりたちよちひ柴のみよまよひても
老よけるりか〇頼政の歌も同時なり(新拾)中前参議為秀四位よ侍ける頃寄山述懐
といへる心をよめる藤原為邦「くらゐ山またちひいそのかひよるてどがのなるべき道
ひいそりせ

ちひ 慈悲(榮月の宴)三貞信公心のとりよちひの御心ひろく世をたもたせ給へれば
世の人いみづくをいみまうす(源蜻蛉)三十人の心をおこさせんとて佛のし給ふ方便
の慈悲をかくしてりやうよこそいあなれとおもひつゞけ給ひつゝ

ちひへ (土佐日記)下えしもこそちひへとて妙本誣へトカケリへト子ト五音通セリ
えこそしひあなどらねといふ事を畧していへる詞よ

補 ちひがもと (空穂 菊の宴)九「うをそくがおこかふ山のしひがもとあかそを
いし床よしあらねば(源椎本)廿八「たちよらん蔭とたのみし椎が本むなまき床よ成
よけるりな

ちひれよしひれ (榮うちく)四十水づきもせせ出きて御腹たゞちひれよしひれて
れいの人のもらよりもむけよならせ給ぬ(和名)一十七糍之比奈世穀實但有皮而無米
也

ちびら (源浮舟)四十侍従もあやしきしびらたたりしをあざやれたればそのもをとり
給て君よきせ給ひて(同末摘)廿三しろきぬのいひしらせをけたるまきさかけあ
るしびらひきゆひつけさるこしつきりさくましけなり(同夕の夜)八八ちびらたつも
のとさりひきりけて(枕)十二十二裳のおろみちびら〇摺うと裳を (女官節抄)ち
びらいうも裳の事也男の袴の上は着也女のから裳の上よきるなり摺と書也

椎のこやて (万)十四廿四「おそのやもなをこそまためむつをのちひの故夜提のあひ
いたがそし〇万ナルハ東哥ナレハ小枝ヲコヤテトヨコナマレルナリ(新六)六(夫)

廿九衣笠 「むらつをのしひれこやてのよふればひとのこゝろもあひたがそめや
内大臣

(同) 六百番哥 合顯昭 「山人のたよりかりとををりべなるをひのとやてのをらむもあらな
ん補(万) 廿四 或本歌曰「おそそやも君をいまさむむらつをのちひのさえごのとれ
はずぐとも〇こやてのし小枝なること此歌まであるべし（此言論傳）

あひこと強言ト誣言ト二ツアリ（同）

あひこひ（兼盛集） 廿「さだしくまこりまきみがいひこひを何とざしよりまたの
さませる

あひて（古） 春下 業平 「ぬれつゝぞしひて折つるとしれうちよさるのいくらもあらトと

おもへば（敦忠集） 廿「あひてのみとが身をふればひとつみもおとらぬもの涙な
りけり（六帖） 四 （古） 戀二 興風 「こびぬればしひて忘れんとおもへとも夢（古）てふものぞ人

たためある（六帖） 上 （後） 貫中 「名よおのしひてたのまんをみかへしそなのこゝ
ろの秋のうくととも（空穂 樓の上） 上 十六 あひてあみたをねんとこゝろをいづめてひら

んとし給ふ（同） 國讓 下 廿「まうでくるべき事あめればぞあべしをあれしひてかく
すればいとよくきざりし（同） 樓上 上 十六 殿上の人此ものゝ音のきくやいづくよりあ

らんとあやしと仰せ給ふちり侍るいとあやしと申あひてきりせ給へば東たつみ

のさうよりたこゆ（同） 六十 みまのもとよて啓せんとおもふし樂のこゑきんのひ

びきよきつけ給ふべくもあらせしひてこゑのかたけりを出して藏人少將藤原のの

ぶらた内よりさふらふと申（古） 離別よみ 人しらす 「あひてゆく人をとゞめん櫻花いづれを

道とまよふまでちれ（後） 春下よみ 八しらす 「ふくりせれさをふものとのちりあからちりぬ

る花のしひてこひしき（うつほ 梅の花笠） 七「雪れうへしひて草木のもゆればや

春日よとおひありといふらん（源 帚木） 四十人ぐられたをやたさるよつよき心を

ひてくまへされば（土佐日記） さすがよとちていもせしひてとへば

あひゆく（貫之集） 「あし引の山れりひよりあまとてりしひゆく人をたちかく

そらん

あひさのそで（榮 月の宴） 卅おなト諒闇かれどたゞ一天下の人鳥のやうなりよも

山のしひしバのこらトとみゆるもあそれよかん（後拾） 哀傷 一條院 「これをたよかたみ

とおもふをみやこよはむりへやしつるあひしを（新葉） 哀傷 新宣 陽門院 「けふ又

あやめの草よ引りへてうたねぞかゝるしひあその袖御かへし 嘉喜門院 「おもそよあやめ

もいらぬしひしを此袖ようさねのかゝるべし（月詣） 中納言 長方 「千載（中） 維「もろ人

の花さくをよそよみてなすくゝるしひあその袖〇椎柴の喪服の染草也と

いふ補(八代集抄)よおひーハ此袖ハ八雲御抄ハ四位の異名云々といふを引たるハ
誤かるべー〇瀆臣云おひ柴の袖ハ貴賤通用喪服をいへりちるるを八雲御抄異名部
ハ四位おるーとの袖とあるより或抄物などよも四位の服也と註せるハいみじきあ
やまりありたゞ喪服のことかるよーハ枕冊子榮花物語後拾遺千載秘藏抄等ハ明證
あり

おひおろー(源藤のうらひ)七みたりダハくおひおろー給ふを

おも下(源帚木)九おもよゆよをりてさゞいまゝおらんと侍といふ(同空蟬)十おと

とひよりそらをやみていとどりなけれハも侍りつるを(同あらし)十ものへさ

たりたるおものやよさふらひ(同浮舟)九おもれ人々のおのびて申ーハ女をなん

くくすゑさせ給へるけーハあらせおせ人なるべー(同若紫)三このつゞらを

りのーもおなトこしをかれと(枕)三もかうのおもいさゞをこしぞある補(宇治

拾)二ノ我妻のおもあるところよふーて

おも臣下又(源玉葛)八十弓矢もちたる人ふたりさてハーもなるものしらさかど三四

人〇賤キ官人ナイフ(同帚木)九をのこれおせやけよつうまつる云々かみハーも

よおおろりそれよりーもハかせーられ(同タカは)十おものーかハらめ

おもておは(伊勢物)九京よおもふ人なれハーもあらせざるをりーも(源うさ舟)

一おはるりならん岸よーもこれをかれたらんやうハ心ぞそくおせーて(拾)別よみ人

「とれーもあれ秋ーも人のこるるれハいとゞたもとぞ露けかりれる(同)忠見「露

またよあてトとおもハー人ーもぞ時雨ふるころたびハ行ける(同)物名ま「うゑて

みる君たよーらぬ花の名をたれーもつけんこと此あやーさ(千里集)「秋過バちり

なんものをかくとり此まづもみぢせの枝よーもなく(榮楚王夢)七よの中よかゝる

事をたよーもあらせ(伊勢物)廿二「うれかから人をバえーもおせれぬハつうら

みてもおせどこひーき(源のしハ木)廿三「うれかから人をバえーもおせれぬハつうら

よかふべき事よハあるべき(同胡蝶)十「うらかくーもうちとけたれみきこゑ給ふ

らんこそ心ぐるーけれ(同帚木)四女のこれハーもと難つくまトきハ(同)九かなら

せーもおおもふよかなはねハ(同わかあ)上ノこそよりことハまさりきのふよ

りけふハめづらーくつねよめかれぬさまれー給へるをいりでりくーもありけんと

おせは(同楨柱)三「かーこよあちとりてよくーもおもふまトき人のもれー給ふなる

がいとろーさよ(同)十おのがあらんよのかざりハひたふるよーもなとろーしたガハ

くづられ給とんと聞え給ひて(源 夕かほ)廿こよひもさふらひでめしはさへおこ
 たりつるをよくとおもはぬものから(同 わのあ)卅七ものゝらべこのものど
 もへしもけし律をば次のもれしたるいさもありり(同)四十それへしもあるま
 下下死事よかん(同 横笛)廿せめてきりせ奉らんのことろあれは今しもことこのついで
 と思ひいでたるやうにおおめりしうもてあして(同 くてふ)四親ときこえんよひよ
 けなうとかくおへしまはめりさしからびたまへらんしもあそひめでたしうと
 おもひるたり(同 あふひ)初よのひぐくをりせさせ給ひつゝ今の御有さましもめ
 せし(同 若菜)下七かくい死いで給ひて此のちしもおそろしくおせして(同)九十
 今しかくしもかよふまとき御ふとのとぢめとおおせ(同 柏木)八いりなるむりし
 の契よていとりのことしも人ししみけんとなくしゝるざり入給ひぬれば(同)三
 ことよをぐれてめでたうしも(玉葉)秋上定家「心あてのおもひの色ぞたつた山けさ
 しも染し木々のをらつゆ(俊成卿女集)「かくてしもありせばいくよ過ぬらん山路
 のこけれつゆのむしろよ(貫之集)「さくかたけりちらせせてぬる菊の花うべしも千
 世れよそひのおらん(同)「なべてしもいろかそらねとど死をかる山よの秋もをら
 れざりけり(躬恒集)「老し身のからきものかりけふそしもぬれしぬれむ菊のし

らつゆ(同)「老ろたへのいもが袖しも秋のゝよよいせまねくそなきしきりか
 (新後撰)春上後嵯峨院「みな人の家路わさるゝ花ざりりなぞしもりへる春れりりがね
 (増鏡)さのみしもいしか(大鏡)よろづのやしろよ額のかゝりたるよおのれがも
 どよしもな死があしければ(貫之集)「心しもかよそしものを山近み鹿の音きけは
 まさるこがこひ(同)「竹をしもおおろくろゑたるやどなれば千とせを外のもれとや
 ひみる(和泉式部集)「中々よおのがふなでれたびしもぞ死のふれふちをせともし
 りぬる(小大君集)「此よよいつ死しもそてしもおもふことこのちれ後いつつたゆ
 べ死(拾)雜秋貫之「ひとり終のこびしきものどこりよとや旅ある夜しも雪のふるらん
 (後拾)羈旅惠慶「くゞと山こゆるけふしも春雨のかきくもりやひふるべりりける(枕)
 一見えはしらさんなどいふそとよしもこれまらせんと御硯をどさしいる(玉帚)
 二云「かくてしも色の千種のあともなし雪は花野のあけ卒のゝ空〇云々し助辞
 よてかくても也云々さてし助辞をがらもしといふよの却てといふ意をかろく
 ふくみたるがおろくあるなり證哥多し云々 或人間云しもと云し却ての意をふくむ
 といふ事古へよりいづれの先達もさたなき事あればよしや上古の哥よのさる心あ
 りとも頼阿などの其心よて讀るよと有まし歎答云此うたがひ一とさり理り也い

りよも頼阿も志もよ却ての心をふくむといふ事をみづから知てよめるよそあらぬ
然れども古哥の詞づりひの意味を志せんと心の底よ會得してよめる故よさはおも
そねどもおのづからその心をふくめる也をべて心よ自然とその其意味をわらま
へかからも是のりやうくのの意味をどさしてのみづりらもえさどらぬ事おろき物
よて中比よりの哥よそのたぐひおろされば古への詞づりひの意味をうか
せよくかかへる事も其作者よとよ却てみづからいひひとりぬ事おろるべし
それを後世よよく考へ明らむるが學問也

志も こそヨカ (万) 十八 七夕長歌 うつせよのよの人われもこをしもあやよくす
みゆきかむるとよのそことよあまれそらふりさけ見つゝいひつぎよすれ〇宣長云
此結句れト留タルハイカマナレドこをしもトイヘルもノ詞ニこそニカヨフ例
アリ

志も 霜 (和泉式部集) 上 「かこよきも終られぬねやれうへよしもいとあやよくよお
けるれさりな

志も 下部 (源蓬生) 廿 志もべなどつりそしてよもぎとらひせ (同 初音) 十 志よのか
せあらぬ志もべどもおどよ (同 柏木) 十 志のしもべ (枕) 七 志かゝる物もてきたる

下部かどよの云々 みづりらもてまうでこぬ下部の云々 下部さふらふとのたまへば
志も 答 (拾) 雜 一 おいそて、雪の山をばいさぐけとしもとみるよぞ身ひえよけ
る (宇拾) 九 志をへて (和名) 十三 唐令云答 音知之 大頭二分小頭一分半 (餘材抄)
云かの人をうつ杖のふとささりなる木を志もと、いひそのしけくおひたちたる
の志もと原かりさればそれをりて薪よとるよ山なればかづらをねりそよしてゆ
へば志もとゆふかづらき山といつゞけさるよこそ

志も とゆふ (古) 大 哥 一 志もとゆふかづらき山よふる雪此まなくと死かくおもゆ
るりな (新續古) 戀一 光明 一 戀ころもいろよの出ト志もといふまさ死のつなれよる
のしぐれよ (散木) 一 てる月の旅ねのどこや志もとゆふかづらき山の谷川の水〇顯
昭ノ注ニ云志もとい答也杖同事也其志もとをきりあつめて葛してゆへば志もとゆ
ふ葛城山といつゞけたるなり (枕) 七 志も、の木こりたちていと志もどがちよさ
しいでたる (万代) 雜一 後京極 一 志もとゆふかづらき山の谷風よ花のゆきさへまなく時
か (續古) 秋下 一 志もてけり露より後もしもどゆふかづらき山此秋のもみぢを
志も とらち (源 蜻蛉) 四十 志もがれのせんざい (和泉式部集) 上 一 霜枯のこびりり

志も がれ (源 紫) 四十 志もがれのせんざい (和泉式部集) 上 一 霜枯のこびりり

けり秋風のふくまのを流れおとづれもうけ

忘もぐーも(源 帚木)廿八忘もぐーもの中よのなでふことりきこしめし所侍らんとい

へど(同 夕かほ)九りのしもぐーもとおもひすてしをまひかれど(頼政集)下二從下

あることをおけき侍るころよめる「おもひきや雲れかけしむりより忘もぐー

もよてあらんものごと

忘も夜(新古)秋下後京極 「死りしすなくやしもよれさむしろよ衣りたし死ひとり

も終ん

霜夜の鐘(夫)廿四匡房一雪ふればたりくなりけるをぐり山いりなるしもよかねひぐく

らん(千載)冬匡房一高砂のをのへれかねのひぐくなり曉りけてしもやおくらん(山

海經) 豊山有九鐘霜降而夜鳴

忘もぞ(源 末つむ)卅忘ろきりみよせてりい給へるしもぞ中々をりしけなる(同

あき) 下十かくれがの御うしろみよてひけしものし給へるしもぞなりしゆくさ

死たのもしけよめたかりける(續古)離別俊頼「あましりも名をたのまけんあふ坂

此關よてしもぞ人よわかる、

忘もづりへ(源 日か紫)四よしをみたるしもづりへを出して(同 東や)卅下づりへの

布どなごよてもかゝる人の御あたりよかれ聞えんいらひありぬべし(枕)五下づり

へまでつゞき立てるたる(空穂 樓の上)上卅八いとりさちあるしもづりへよてぞつ

かうまつりける(枕)六、さらの二人忘もづりへよたりよてもてまゐるめり(同)四、

もづりへおどりのつれてまゐるやご

忘もつらた(源 夕の)初さちさまよらんしもつらた(同 濤標)卅忘もつらたの京

極わたりかれバ人けとなく(同 松風)廿いそけかけあるしもつらたもま流らひさん

あと思ふを

忘もつやみ(千載)夏仲正「どもしるるやぐりのまつももえつきてりへるよまよふ忘

もつやみり(大鏡)花山院の御時よ五月しもつやみよさみたれもを流て(頼政

集) 「かひくたれう舟よかゝるりや火のみえぬよな死しもつやみり(今昔

物) 廿九月トツ暗ノ比燈ト云事ヲシテ

忘もつけの花(和泉式部續集)「忘もつれ花と見るこそかひなけれ人のとふべき

みりいとおもへバ下野ト三河ノ國名

忘もの十日(堤中納言集)貫ユキ三月しもの十日京極のふちのそかれえしもべりけ

るとき

補 霜のよもぢ(續後拾) 雜下、後光明峯寺 前攝政左大臣 「みるもうゝむりふ鏡の秋れ影衰へまさる霜のよもぢハ

補 志もの鶴(新千) 雜中、家隆 「わりの浦や入江のあゝの霜れつるかゝる光よあそんとやみ一(忠見集)九「ちとせふる志ものつるをばおさかからさくのをなこそ久一かりけれ

志ものや(源 蓬生) 五 「もれやさものそりなきいさぶれある一

志ものふり(古) 大、哥所 「水く死の岡れやうたゝ妹とあれと経てのあさけの一ものふりも **補** 拾愚 「道のべれ人ぞとけれおもひ草霜のふりも朽ぞとてぬる一

補 志もの衣(新千) 秋下、後久我 太政大臣 「長夜の霜の衣をうちびてねぬ人一るれあさぢふの宿

補 志もの下道(新後) 冬、光明峯寺入道 前攝政左大臣 「たれめおく故郷人のあともか一ふりさこの葉れ霜の下道

補 志もの十五日(榮 初花) 十 「もれ十五日あまり一の

補 志もの人々(源 浮舟) 九 「もの人々の一のびてまう一の

志もくち(賴政集) 十七、隱 傍女戀 「志らけなよつがねならびの志もくち一のれいひあ一きものどこそ一れ(平家物) 七、くたんの女房の志も口邊一と、むむてき、けれ

志もぐち(和名) 三、十四、瘡類漢書音義云、瘰和名比美辨色 立 手足中寒作瘰也(蜻蛉日記) 中、屋のうへの霜いと志ろ一らへべよべのすがたから志もぐち一あま一をそんとてさ一とぐもい一とあそれなり、俗霜腫といふもの也

補 志もぐもり(万) 七、四 「霜ぐもりせんとよりあらむ久一たの夜とたる月の見えぬおもへ一バ(風雅) 冬、隆教 「おやろかる光もさむ一霜ぐもりさえさる空よふくるよの月

志もや(源 松風) 三 「もやまぞつくろひてやどり侍るを

志もや(新古) 雜上、具親 「ながめよとおもそで一もや郭公またかりぞらの月一あくらんり舟補 (新拾) 夏、順徳院 「暁とおもそで一もや郭公またかりぞらの月一あくらん

志もや(源 柏木) 廿五 「いとらうけふあす一もやのとみづから一らぬいのちのやどをおもひの一どめ侍りけるもそりなくなん

志もけい(源 夕かほ) 廿三、廿四 「つま一き志もけい一よて殿一もつらうまつるものなりけれバ(河)ニ云諸大夫也

志もこそ(源 帚木) 四十 「おやえな死さまかる一もこそちぢりあれとおもひたま一め **補** (千載) 哀傷、上西 門院兵衛 「ちり一と、よとかる、けふれか一さ一をさ一と一もこそとまら

ざりけれ門 九家の内出をめけんをさのさこそのおおえけめさかくもてゆく

よおのづりらおもかれぬべ一

補 忘もあれ(新續古) 哀傷哀傷 一月影のうた世は出しけふもあれをどたらちねの雲

がくれけん(同) 高範高範 一時もあれ袖より花をけそへて雨もなみたもそれぬ空

りか二

忘もあさ(源 末摘) 卅さむきもあさ云々

忘も人(源 はし姫) 十忘も人よてもみやこのちたよりまゐり立まゆる人侍るとき

(同 夕のほ) 卅その家なりける下人のやまひしけるが俄よえいであへでなく成よけ

るを(同 須磨) 十御供よたゞ五六人をりり下人のむつまじきかぎり(同 湯標) 廿

ろしれるも人してやりけり五

忘すゑ(源 わり紫) 廿たゞゑまかきたる姫君のやうよをゑられて(同) 十いつり

ひゝあおしすゑてをゝ泥る給へり(同 東や) 廿尼よなしてふりき山よやいすゑてさ

るかよ世中をおもひたえて侍らま六

増補雅言集覽卷之五十一終

